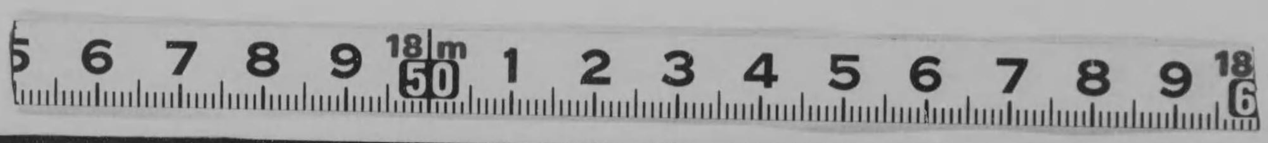
355
31n



355-31わ

資本主義の精髄

全

大正
6. 2. 5
購求

序

現時に於ける各國民の經濟的活動は近代文明の一大特徴を爲してゐる。今日世界に雄飛しつつある國民は皆進取的精神を以て國民經濟上に於ける勢力を發揮せんと努めざるはなく、國運の發展も殆ど其國民の經濟的勢力と比例しつゝあると言つてよいのである。近來世界的に發展しつゝある國民、就中英、米、獨の如き其活動の徑路は國内に於ける産業の發達によるのであつて、産業

上に於ける優者が世界文明を支配するが如き形勢を示してゐる。從つて今日是等の諸國に於ける産業組織の雄大なる發達に至つては之を過去のそれと比較して實に驚くべき現象を呈して居る。往時に於ては商と言はず工と言はず、多くは地方的顧客を目的として小資本と小數の徒弟使用人とを以て商工業者自ら家内營業的に業務に從事し、極めて小規模の組織に過ぎなかつたが、現代に於ては實に大なる資本と無數の勞働者とを統合して大工場大商店を組織し、世界を相手とし

て生産取引上の活動を爲しつゝあり、其規模の雄大絶倫なるものに至つては人をして啞然たらしむるものがある。例せば米國に於ける合衆國製鋼會社の如きは其最も偉大なる實例であるが、資本金だけでも殆ど古人の夢想だも及ばざる額に上つてゐる。卽ち公認株金二十二億圓、社債六億八百萬圓、合計二十八億八百萬圓の資本を擁して前古無類の生産活動をなしつゝあり、此資本金を米貨一弗(二圓)紙幣を以て之を繋ぎ合すれば、十六萬六千二百哩に達し、地球を六重に卷いて八千哩

に達する二條の吹流を飜へし得ると、昨年同會社の歴史を書いた一著者は述べてゐる。其生産組織の絶大なるは推して知るべきである。「近代に於て歐米列强の商工業は何れも大資本に依て組織されてゐるが、而も産業界の趨勢は益、集中擴張（コンセントレーション）の方向に進み、所謂、トラスト、カーテル、フュージョン、アマルガメージョン、シンディケート等の名を以て世界を驚かしつゝある。獨り是のみではなく、或一種の生産を以て滿足することなく、更に之に關聯する他の生産をも兼業して産業界を支配せんとする勢力を示しつゝあるのであつて、前述の米合衆國製鋼會社の如きは要するに此近代に於ける産業組織上の傾向を極端に實現したものに外ならない。勿論米國のみではない、英國に於ても獨逸に於ても其他經濟上に於て有爲の能力を示しつつある邦國に於ては、大小の差はあれ、皆此大勢に動かされないものはない。勿論、斯くの如き産業組織の發達の裏面に於ては又勢力絶倫なる幾多の産業界の雄者が操縱の任にあたつてゐることは言ふまでもない。斯くの如き産業上の特

徵を近代經濟史上に於ては近代產業本位制(モダーン・インダストリアリズム)又は近代資本本位制(モダーン・キャピタリズム)と概稱して居る。

斯くの如き現象は沿革的に言へば十八世紀に起つた所謂產業革命以來發展し來つたものであることは今茲に絮說するの要はない。此產業組織の起るに就ては言ふまでもなく資本と企業と言ふことが根本の要素をなして居るのであつて、近代の意味に於ける企業家資本家の勢力は產業の發達と共に益〻增長しつゝあり、殆ど國民經濟上に於ける生殺與奪の權を握つてゐると言つてよ

いのである。現代の產業は彼等の指導の下に進轉しつゝあるが故に、英米等に於ては是等の雄者を呼んでインダストリアル・キャプテンと稱して居る。往古に於ては有爲の士が社會に活動するに當つて、或は政治、或は學問、或は軍事等に於て名を擧げ權力を得んと努めたものであるが、現代に於ては產業界に活躍して一身を經濟上の利得に捧げ名譽と權力が其成功に伴ふと言ふ新現象が起つてゐるのである。所謂實業家なるものの勢力は隆々として向ふ所敵なく、世界に橫行闊步しつ

つある。是れ素より近代産業發展の結果であるが、又他の方面を見れば是等の資本家企業家に使用せられ、直接生産に從事しつゝある多數の勞働階級に至つては其生活上の運命は必ずしも彼等と同惠に浴するものではない、否却て利害に於ても往々相容れず、相互の生活關係は益懸絶して殆ど階級的區別を生じ、玆に所謂社會問題、勞働問題として、如何に其相互の關係を調整すべきやの大問題を發生せしむるに至つた。是れ實に現代に於ける世界の大問題である。獨りそれのみでな

い、此物質的利得を逐ふて止むことなき資本的企業精神の發展、極言すれば拜金的勢力の擴張は究極人類の幸福と文化の上より飽くまで喜ぶべきことなりや、是れ又世界文明上の大疑問と言はねばならぬ。

翻つて我が國に於ける狀態を觀察すれば、近代的産業の趨勢は次第に進張し來り、今日何人も口を開けば國富の充實、國民經濟の發達を說かざるものはない。卽ち我が國の産業を進めて、歐米の列强と對抗するの域に達せしめねばならぬとい

ふ希望は何人も抱いてゐる。併しながら現在に於ては我が國の商工業を初め産業の發達は國内に於てこそ非常の進歩を示したとは言へ、先進諸國と比較すれば尙甚だ幼稚の域を脱しない。勿論多年來有爲なる人士も此方面に活動し來つて近代式の企業家も着々現れ、又資本の勢力も愈、擴張しつゝありて、次第に歐米に於ける如き狀態に進むの傾向著しきものあれども、尙我が國民の經濟的能力は果して歐米の雄國に現れたるが如き實蹟を擧げ得べきや否や、換言すれば我が國は近

代式の産業國として世界に活躍し得べきや否やと言ふことは往々にして疑問とせられないでもない。外國の一經濟學者の如きは嘗て日本の國民性は果して現代式の産業國民たるに適するや否やを疑ひ、日本は寧ろ美術的趣味方面に於て人生を樂しむと言ふことに適し、かの英、米、獨等の人人の如く、一世を産業に捧げて死に至るまで努力已まずと言ふことは如何であらうかと觀察し、人生の本義から見て寧ろ人生を樂しむと言ふ日本人の特徴を發揮する方に努力するを可とするに

非ざるかとの說を爲したこともある。然しながら明治以來我が產業界の狀勢を觀察すれば必ずしも我が國民は經濟的能力に於て敢て人後に落つるとも思はれない。今日までに於ては其發達尙種々なる點に於て不十分であるが、其向ふ所を察すれば、將來產業國民として發達すべき見込は十分にあると信ぜざるを得ない。我が國の世界的位置を進めるに就ても產業的勢力の發揮は目下の急務に屬し、事實は着々進みつゝあるのである。卽ち近代的資本本位制は我が國に於ても既

に發現し來り、今後に於て益、其勢力を大にすべきは疑ふべからざることである。玆に於て現代的企業又は資本本位制の研究は頗る重要なるものと言はねばならぬ。

近代資本本位制の研究に就ては英國のホブソン教授が早く既に其組織の進化發展を解說したが、ゾンバルト教授が更に一層周到該博なる觀察點に基いて本問題の研究を進め、先に『近代資本本位主義』と言ふ浩翰なる二册の著書を出して、學界に貢獻すること大なりしが、次で『猶太人と近代資

本本位主義』の書を表して、猶太人の精神及び活動と資本本位制との關係を説明し、更に本書を出して近代資本本位制の起原を示して、其傳統を明かにし、獨り經濟上のみならず、社會的心理的に其本質を解剖し、資本的企業精神の發達に與つて力あるあらゆる原因を指摘して殆ど餘蘊なく、此類の著書としては最も暗示的にして興味ある解説を與へた。　元來資本と言ふ概念に就ては經濟學説上議論區々にして容易に一致を見ず、又資本本位主義の解釋に就ても種々なる意見があがる、ゾン

バルト教授は頗る廣義に解釋して「經濟上の利得を唯一の目的とする營利的精神に基けるもの」となし、其精神卽ち資本本位的企業精神の要素として「進取的なる組織力、冷靜なる打算性、投機性、質實なる合理性を高調し」、又中等階級的平民的德性を具へ企業利得を唯一の目的として邁進する征服氣質に依て産業組織を指導する資本家企業者の活動に就て力説した。　卽ち現代各國に活躍しつつある進取的にして精力絶倫なる企業家氣質と此氣質に據つて操縱せらるゝ企業組織とが古來

如何にして發生し、現在如何に發展しつつありやと言ふことを最も周到明晰に且つ徹底的に解示し、又現代國民の間に於ける其消長に就ても頗る味ふべきものがあり、其鋭利なる論法と興味ある解説とは讀者をして殆ど卷を蔽ふ能はざらしむるの概がある。

ゾンバルト教授は早く既に經濟史的研究に於ては獨逸の學界に優越なる地歩を占め、社會問題の研究、特に社會主義的運動の研究に於て學界に貢獻する所大なるは今更言ふまでもないが、社會

問題の根本的對象たる資本本位主義の研究に關しては蓋し同教授の上に出づるものは尠からうと思ふ。本書の如きは獨り現代の産業的精神と其組織とを了解するに必要なるのみならず、現代文明の一大特徴を窺ふべき明鏡と言つても過言でない。今回大日本文明協會が原書を邦譯して之を刊行するに至つたのは最も時宜に適するものとして余は大に之を歡迎せざるを得ないのである。

法學博士　鹽澤昌貞

例言

本原書は現獨逸伯林高等商業學校經濟科主任ウェーナー・ゾンバルト氏の著(原名"Die Quintessenz des Kapitalismus,"—1915)で實に近代實業家の歴史及び其心理的發達を忠實に研究批判したものである。著者は篤學溫厚なる斯界の研究者であり、又人生問題の根本にも精通せる一哲學者であるから、本書が一般に流布されてゐる學究的の無味乾燥なる所謂經濟書の類とは全然其趣を異にせること今更論を俟たぬ。

本書上篇は主として資本家精神の起原及び發達を叙述し、資本家精神の基礎となつた企業及び中等階級の二精神を闡明し、下篇に於ては資本家精神を發生せしめ進歩せしめた原因と境遇とを究めることに努めてゐる。著者の研究に據つても知らるゝ如く、吾人人類の經濟活動が時代に依り又國に依り各其趣を異にしてゐることは言ふまでもない。「然しながら今日は殆ど全世界を通じて狂熱的な經濟活動に奔勞してゐる。是は果して何

時奈邊より起り來つたものであらうか。實に近代の資本家は孰れも古代人の如く單に自己の必要を充たすだけの事に滿足もせず、又射利を目的としながら而も宗教若しくは道德等種々なる社會的勢力の爲めに其目的を實現し得なかつた中世人の經濟活動とも異り、唯々競うて事業の擴張にのみ專らである。」ゾンバルト氏は斯かる近代的新現象の原因を究めたる結果其等盲目的活動に對して尠からざる失望を感じ、未だ本書に於ては具體的に叙述しては居らぬが之が救濟策に就て大に講究し、資本主義をして眞に意義あるものたらしめんことを希望してゐる。

ウェーナー・ゾンバルト氏は一八六三年の出生で、大學卒業後專ら經濟學の研究に從ひ、夙に名聲を博して一八九〇年より一九〇六年に至るまでブレスラウ大學經濟科々長の職に居り、更に現地位に就きてよりは益〻斯學の研究に餘念なく、今日に及ぶまで幾多の著述を公にして學界に貢獻する所尠なくない。今本書以外の著述中其主なるものを擧ぐれば左の通りである。

『社會主義と社會運動』("Sozialismus und soziale Bewegung,"—1896)

『近代の資本主義』("Der moderne Kapitalismus,"—1902)

『十九世紀に於ける獨逸の經濟學』("Die deutsche Volkswirtschaft in 19ten Yahrhundert,"—1903)

『貧民』("Das Proletalist,"—1909)

『猶太人と近代の資本主義』("Die Yuden und das Wirtschaftsleben,"—1911)

我が國の實業界乃至產業界亦近代資本主義の大勢に感染して狂熱と動搖との渦中に彷徨せるが如き觀がある。此際に於ける本譯書の提供は大洋の怒濤中に漂浪せる船舶に羅針盤を供給するに等しく將來の事業界に堅實なる發達の方向を示すに足ると思ふ。本協會は時勢に最も適切なる著述として本書の必讀を一般國民に推薦するを憚らぬ。因に本書はドクトル・オブ・フィロソフィー佐久間秀雄氏が努めて平明を期して原意を極めて理解し易からしめんために邦文に纂譯されたものである。又本會編輯顧問法學博士鹽澤昌貞氏は歲末殊に繁忙の時期なるにも拘はらず、本會の請に應じて本書の序を寄せられた。茲に鹽澤、佐久間兩氏の勞を深謝し、併せて

原著者ゾンバルト氏に向つて深大なる敬意を表する。

大正五年十二月

大日本文明協會識

目次

第一章　資本家時代以前の經濟觀……一

上篇　資本家精神の發達

（第一）企業の精神

第二章　黃金慾……一五

第三章　金錢獲得の手段方法……二四

強力に依る—金錢の獲得奇術—に依る金錢獲得—

目論見及び發明に依る獲得—金錢に依る獲得

第四章　企業の精神……三九

征服者たる資質—組織者たる資質—商人たる資質

第五章　企業の起原……四六

第六章　資本家的企業の根本形式……一三
軍事的企業—莊園制度—國家—寺院
海賊—地主貴族—官吏—投機師—商人—製造人

（第二）中等階級の思想

第七章　中等階級の道德……一六
聖き經濟—實業道德

第八章　計算術……一三

（第三）資本家精神の國民的表現

第九章　諸種の表現……二六

第十章　諸國に於ける發達……三一
伊太利—西班牙と葡萄牙—佛蘭西—獨逸—和蘭—

大英國—北米合衆國

（第四）過去及現在の中等階級

第十一章　舊式の中等階級……三六

第十二章　近代の實業家……一七

下篇　資本家精神の淵源

第十三章　本問題の性質……二〇七

（第一）生物學的基礎

第十四章　中等階級の氣質……二二五
企業的性質—中等階級の性質

第十五章　國民性……二六

（第二）精神的諸勢力

第十六章　哲學……二四〇
第十七章　初期資本主義時代に於ける宗教の感化……二四九
加特力教徒―新教徒―猶太教徒
第十八章　加特力教……二五八
第十九章　新教……二七〇
第二十章　猶太教……二九〇
第二十一章　精神的感化と資本家精神……二九四
（第三）　社會的狀態
第二十二章　國家……三〇五
第二十三章　移住……三二三

猶太人の移住―迫害されし基督教徒の移住―
植民運動特に米國移住
第二十四章　貴金屬と其發見……三四一
第二十五章　技術的發明の影響……三六〇
第二十六章　資本家時代以前に於ける職業の影響……三六八
第二十七章　資本主義本來の影響……三七七
結論
第二十八章　回顧と豫想……三九一

目次終

資本主義の精髄

第一章　資本家時代以前の經濟觀

資本家時代以前の人は、神に造られた通りの自然の人であつて、今日の經濟的活動に見る如き、四つ這ひになつて驅け廻つたり、或は頭を下に逆立ちをするやうなことはなく、確乎と兩脚を踏んで立ち、他に何の助けも借らずして、唯其脚を頼みに立働いたものである。されば其經濟觀念の如きも全く自然に發生したものであつた。抑、當時の經濟狀態に於て、一切の事物の中心は人であつた。從つて一切の經濟的活動は、人の必要に應ずるを以て唯一の主旨とした。此根本的の主義の下に當時の經濟的活動は、人の自然の欲求を滿足させる物品を供給したのである。されば其生産の量も人が消費するだけの分量と相等しかつた。人の支出は各、其收入と平均を得な

明治大學

ければならぬが、先づ支出が定まつて、然る後に收入が決するのであるから之を名づけて『支出標準制度』と言つてよい。資本家時代以前、中等階級時代以前の經濟は、此意味よりすれば『支出標準制度』であつた。

然るに此處に所謂人の必要なるものは、各個人が勝手次第に定めるものではない。社會には種々の階級があつて、此階級の間に人の必要の分量や性質が、時と共に發達して、遂に習慣的に定められるのである。故に資本家經濟以前に於ては、各階級が各自必要に相應じた十分なる生活をすることを主旨としたが、所謂人の必要には一定の制限があり、規準があつた。經驗上如何なる物が、幾干の分量まで必要であるかと定まると、法律や道德の上からも亦其通りに認め、而してそれが一の標準と看做さるゝことになる。トマス・アクィナスは右の如き意味の『十分なる生活』を以て其一大教義とした。アクィナスは、人と世界との關係には、或制限、規準がなくてはならぬ、其規準とは卽ち身分相當の必要であると敎へた。一口に言へば、各個人の必要なるものは、其分量と其性質とに於て身分卽ち地位や境遇等に相當した

標準に依るべしと言ふのである。斯くの如くにして資本家經濟以前の社會には二大階級別が生じた。貴族と平民、富者と貧民、土豪と農夫、商人と職工と言ふ如く、一方は獨立不羈の生活を營んで、別に何等有用の仕事をせぬ人々で、他方は其額に汗して一生懸命に麵麭を得る連中である。

然らば先づ貴族的生活とは如何なるものかといふに、それは自分の用事に他人を使ひ、晝は或は戰爭に出掛け、或は荒野に狩獵し、夜は面白く博奕に耽り、美人の腕を擁し、城塞や寺院を建て、武術の試合等に華美を競ひ、財布の許すと否とに頓着なく、贅澤のしたい三昧をするのである。そこで支出は常に收入に超過する、隨つて斷えず收入の增加を計らねばならぬ。卽ち家令は村民の納物を增徵し、庄屋は小作料を引上げる。さなくば經濟的以外の方法を取つて其不足を補ふ。何れにもせよ、古來の貴族は黃金を卑しみ、總ての經濟的活動を甚しく蔑視したのである。

俗界貴族の生活は斯かる風であつたが、宗敎界の貴族卽ち僧侶等も亦長い間同樣の生活をしてゐた。アルベルチは第十四世紀頃のフロレンスに

於ける僧侶の貴族的生活を記して次の如く述べてゐる。

僧侶は華美と驕奢とを以て他人を凌駕せんと思ひ、肥馬を養ひ、多人數の從者を隨へて公會に出入する。怠惰は日と共に甚しく、其行狀は愈〻不德に流れる。富裕な財產を天より與へられて居ながら、其分を以て足れりとはせず、勤勉節約の思想は毫もなくして、只管物慾を滿足せしむべき手段を得るに全力を傾注してゐる。彼等に取つては其收入は常に不十分で、支出は斷えず增加するのみであるから、彼等は常時其不足を補充するに汲々たるのである。

之に反して、一般人民の大多數は如何なる生活をして居たかといふに、資本家時代以前を通じて、彼等は全く必要なだけの生活をしたに過ぎない。平易に言へば、單に糊口し得るだけの生活であつた。欲求も少ければ、之を滿足させることも少く、一家の經濟は極めて微々たるものであつた。前にも述べた如く、社會上の地位や身分等で欲求の標準が定まり、それが習慣となつてゐるのであるから、資本家時代以前の經濟上の立法も組織も、悉く『生

存に十分なること』が其中心思想となつてゐた。

斯くの如き思想は、歐洲太古の森林中に育てられた諸人種間に起つたもので、日耳曼族の村落社會なるものは、右の生產方法に依て出來た一の經濟的單位であるが、ケルチック族でもスラーヴ族でも亦同樣の思想を有してゐた。而して上記の思想は農民より商工社會に及んで、商工部落の組合組織も農民部落に於けると同樣に一定の制限された欲求を滿足させると言ふ觀念に基いて成立つた。農民は土地の所有者となつて、それで自分に必要なだけの生活を營まんことを望み、手工者は其製造物の購買者を得んことを欲し、双方求むる所は異つてゐるが、其根本の思想は同一であつて、『生活に十分なること』を以て主義とし、此主義に依て全く支配されてゐたのである。即ち生活さへ成立てばよいので、唯それだけの話に過ぎない。此思想が常に彼等の經濟的活動の原動力となつてゐた。

全體彼等は何故斯かる精神で居たかと言ふに、彼等は何れも平凡な頭腦の發達せぬ人間であつた。中世紀の法律を見れば、頭腦の不透明な人々が

作つた跡が歴々指摘されると言ふが、經濟界も亦其通りであつた。今計數に關する一例を擧げんに、彼等の計數の智識は頗る低級で、商人と雖、數を精確に取扱ふことを知らず、又其必要をも認めてゐなかつた。元來數を正確に合せることは近世に始つたので、其以前に於ける計數は唯概算に止まつてゐた。故に中世紀の算數表を檢査して見ると誤謬だらけなるを通例とする。物價の計算も其例に洩れない。實際數に掛けては當時の人の智識は近代の兒童位のものであつた。

例へば中世紀の簿記帳を檢せんに、是が其時分有名な商人であつた者の帳簿とは殆ど受取れない。今日地方の小商人の帳簿に見受くる如く、收支共に順序構はず規律も立てずに書き留めてあるだけで、到底簿記帳とは言はれぬ。百姓が市場に出掛ける時、物忘れせぬ爲めに手拭の端にでも、括つて置くと言つた樣な極めて粗末な覺帳に過ぎない。精確な計算をする頭は少しもなく、幾干が貸で幾干が借か、之を明瞭にしようとも努めて居らぬ。

一、手袋一箱——但、幾組入れてあつたか覺えぬ。

一、貸金十九圓——誰に貸したか忘れた。

總てが斯樣な調子であつた。

物品の數量に就ては右の如く粗雜な頭であつたが、品質に至つては頗る注意を拂つてゐた。近頃の文句で言ふと、交換の爲めの價値には無頓着で使用の爲めの價値は重んじたのである。仕事其ものに掛けては、農民でも手工者でも、兀々として熱心之に從うた。恰も美術家のやうに、彼等は其仕事を生命とし、且つ之を愛してゐた。故に其製品を惜んで容易に手放すことを欲しなかつた。屠場に飼牛の牽かるゝのを見て農婦は泪を流した。陶器師は商人が買ひに來ても容易に造つた陶製の煙管を賣放さうとはしなかつた。若しどうでも賣らねばならぬ場合であつたならば、自分の名を辱しめぬ製品のみに限つた。此心は農民も手工者も同一であつた。斯樣なる氣構へであつたからこそ、粗製濫造等は見ようにも見られなかつたのである。

彼等の經濟的活動は甚だ遲緩なもので、何か口實さへあれば喜んで仕事

を休んだ。彼等が經濟的の仕事をするのは、猶小學兒童が學校に往くと同じ心持で、往かねばならぬから往く、働かねばならぬから詮方なく働くに過ぎぬ。されば休日にする機會さへあれば大喜びで休み、少しも經濟的活動を盛んならしむることを欲しなかつた。故に資本家時代以前を通じて、休日、祭日は實に多い。第十六世紀當時バヴァリア國の或鑛山では二百三日中で働いた日が僅に百二十三日、又他の鑛山では百六十一日中九十九日、今一つ他の所では二百八十七日中百九十三日に過ぎなかつたとのことである。

加之、仕事其ものも甚だ遲かつた。早く或物品を仕上げたり、又は或時日内に澤山の品物を拵へるといふやうな事はなかつた。蓋し物品を早く造るのは、第一には善良で信用さるゝものを造るに要する時間と其仕事をする人自身の生活上の必要との二點を考慮するに因するのであるが、中世紀に於ける生產事業は前にも述べた如く、人を中心とし而して人が生活し得れば足りるのである。且つ當時の人々は各身を其仕事に捧げて居て別に何等仕事を急ぐべき必要も動機も有してゐなかつた。卽ち當時の生產業

を支配する法則は、全然自然的であつて、猶樹木の生長や禽鳥の歌ふに譬ふべきものであつた。

斯かる時代の經濟的活動を支配するものは、經驗主義である。或は又之を傳說主義とも言ふ。卽ち彼等の經濟生活は傳說的に組織されてゐたのである。換言すれば敎へられた通りにする、昔から仕來つた通りにすればよかつた。規則を造るにも、決斷をするにも、將來や結果や目的如何などを考へるのではなく、昔は如何であつたか、それは型に嵌つて居るであらうか、慣例に背いては居らぬか等と考へるのみである。此意味よりすれば、人は自然の狀態に於ては傳說主義者であるのが普通であつて、如何なる文明も其最初の時代には傳說に支配されないものはない。是は人性中に深く根ざして居る道理に基くので、此道理の由來を糺せば、人の心意中には成るべく停止の狀態にありたいと言ふ强い傾向が存するのである。吾等は出生と同時に否出生以前から、境遇に制せられて一定の道筋を踏まねばならなくされてゐる。吾等は師父の敎訓、動作及び感情をば、一言の質問もなく承

認する。『人間は進歩の度合が少ければ少いだけ、模範、傳說、權威、及び示唆の感化を多量に受けるものである。』

傳說の感化は更に習慣に依て助けられる。人は一度爲したことを又爲すべき傾向を有するもので、其爲めに益、舊き道筋に謬着することになる。『習慣性は經驗より生れたる意力或は欲望なり』とは、巧みに定義したものである。最初は冷淡であつたり、不快に思つてゐたりした思想も、最初に愉快に思つてゐた思想と融合すると、一變してそれが愉快な思想となる。經驗は實行で、實行は慣習を生む。當初困難な實行も繰返せば容易となり、其初めは手許の危かつたことも確乎と出來るやうに、特殊の機關や特殊の精力中心が訓練されて來る。斯くして人は其活動に際し、愈、益、自己に爲し易くなつた事を繰返す傾向を生ずるものである。所詮人は何事でも新しきを厭ひ且つ忌みて、其習得した所のものを重んずる、換言すれば傳說的になるものと言はねばならぬ。

且つ又個人は團體の一員である。故に人は團體の一員たる名譽を重んぜんが爲めに自ら團體の必要とする所に特別の注意を拂はざるを得ない。

從つて個人は新しき事物に注意せずして、舊き事物の完成に全力を盡すやうになる。斯樣にして各般の勢力は個人をして現存文明の常軌を踏み、其心をして一定の方向を取らしめるのである。『自然力の發露とか、獨創力とか、獨立等は、何人の胸中に於ても頗る薄弱なものである、然るに人の能力や勢力は之を用ふれば進歩し、用ひざれば衰滅するものであるから、如上の自然力は其薄弱さ加減が愈甚しきを加へざるを得ない。』

是等は資本家時代以前に於ける經濟的活動の特質である。否此時代の全體の生活が左樣であつて、停止的社會の根本思想は、斯くの如きものである。此時代の最高の理想はアクイナスの言へる如く層一層完全ならんと努力する個人的內觀的精神であつた。一切の生活の要求も、一切の形式も、悉く此理想を助長すべく組織されたものである。從つて人々は各、其身分職業に依て嚴重に區分せられ、是等の身分や職業は總て全體の社會的有機體に取つては平等の價値ありと認められたもので、其等各個人が正しく生

活し得んが爲めに種々の規律と法則とが設けられた。卽ち經濟上の指導的主義として、生活に十分なることと傳說崇拜と言ふことゝの兩箇の停止的主義を以てしたのも亦此故である。資本家時代以前に於ける生活は、安心な靜止的のものであつた。如何にして此靜止的狀態が、不安定となり、動搖的となつたか。何故に靜的社會が動的社會と化したか。之を研究するのが吾等の次に試みんとする所である。

抑、此變化を齎し來つて舊世界を打破したものは、實に資本主義の精神に外ならぬ。そは現代の精神で米國の金貨王や空中飛行家をも動かすものである。吾等の生活を支配し、宇宙の運命を支配するのも亦此精神である。而して此精神の出現の當初より現代に至り、更に其將來をも論述するを目的として本書は生れた。

吾等の爲すべきことには二樣ある。第一には資本家精神の起原と發達の跡とを辿らねばならぬ。是が第一篇で、其中に於て吾等は全體を部分部分に解剖し、主として注意をば企業の精神と中等階級の精神とに向ける。

蓋し此二精神が合して資本家精神を產出したからである。然るに此等兩精神は共に幾多の勢力の輻輳集合して成つたもので、前者は黃金慾、冒險心、探險心及び其他のものの集合であり、後者は打算と熟慮と合理と經濟とより成つてゐる。資本家精神を一の織物とすれば、中等階級の精神は其綿の緯絲で、企業の精神は其絹の經絲である。第二に吾等は此資本家精神を發生せしめ進步せしめた原因と境遇とを究めねばならぬ。是は卽ち第二篇として論述することとする。

上篇　資本家精神の發達

（第一）企業の精神

第二章　黄金慾

資本家精神の歴史は黄金と言ふ呪はれた物を獲んが爲めに諸々の神々と人間とが爭ふたことから始まつてゐる。世界の爭鬪と罪惡とは水の王國と光の王國との衝突から起つたもので、其原因は全く黄金にあつたと記したものもある。黄金は地球の表徵であり、嫉視競爭の目的物である。人は皆豪奢と權勢とを慕ふが、其象徵たるものは實に黄金に外ならない。エッダには人類の歴史は黄金に對する競爭に始まると記してあるが、さるべきことと思はれる。歐洲人は早くよりして黄金を求め、之が所有を欲したもので、少くも上流階級には斯かる風が存して居つたやうである。如何にし

て黄金に對する欲望が起つたかは古昔のことで茫漠として探ることが出來ぬ。

吾等が獨逸の昏族の金銀に對する態度如何を知り得る時代は、彼等は既に財寶蓄藏の時代に入つて居た。財寶の貯藏は歐洲諸人民の歴史では重要な事實であるから、少しく詳細に之を述べんに、獨逸人種が南下して羅馬を襲うた頃には、彼等はまだ貨幣經濟時代に入つてゐなかつたから、初めて金を見て大に之を欲求した。然し彼等の欲求したのは金貨ではなくして、金の裝飾品や金の皿鉢等であつて、武士は自慢の品、名譽の物として之を見た。加之、黄金の褒美を與ふれば、殆ど何人も彼等を賞讃し、彼等に味方するといふ有樣であつたから、諸侯伯等に取つては黄金は又權勢をも意味した。それより處々を移動しつゝある人民中にあつて、貴族の家では金を貯藏せんとするに至つた。西紀五六八年にヴィシゴス王ロイフィギルトは、王衣を纏うて玉座に就き、而して其財寶を見せた事がある。其時以來國土、人民、及び財寶の三者は、實に王權の堅城鐵壁とも言ふべきものとなつた。

然し昔の財寶は主として鎖や、胸飾や、角盃や、水瓶などと言ふ金銀の裝飾品又は道具類であつた。金銀貨、特に其大なるものが蒐集されるやうになつたのは、それより稍後の事で、遂には金塊をも貴重視するに至つた。是等の物質は概ね國王の訪問、又は條約締結等の大切なる場合に贈品として用ひられ、又時には征服した人民から貢物として獻上させたり、征略の時の分捕品であつたり、領地からの收入であつたりした。

啻に國王のみでなく、誰でも能ふ限りは財寶を蒐めた。王家に小兒が生るれば、直に其爲めに財寶の蒐集に着手したもので、西紀五八四年にフレデグンデ王の二歳になる男兒の死んだ時、彼が爲めに貯へられた金、銀、寶石、絹布等は、四臺の荷車に滿載する程あつたと言ふ。國王の娘等は又其持參品として多くの財寶を貰ひ受けたが、之を盗み取らうとする者の爲めに婚姻の道中を脅かされたことが尠くない。是等の持參品は所謂隨意寄附に依るものもあつたが、又誅求の結果に得たものも多い。國王の爲す所は、貴族も之を眞似た。而して其貴族が又國王から絞り取られることも珍らしく

はなかつた。

寺院も僧堂も此點に於ては俗界の貴族と何等選ぶ所なく、盛んに財寶を蓄積し、銀製の酒盃や罎や又は金の裝釘を施し、寶石を鏤めた聖書などを藏して居た。

中世紀の初めより其終りまでの間は總て斯樣な調子であつたが、それが漸次に進んで遂に金錢を愛する樣になつた。第十世紀より第十一世紀へかけて、東はシレシアより西はバルト海岸に至るまで、銀塊や摩擦された銀貨等が隨分多くあつた。又其頃獨逸、佛蘭西、伊太利等の諸國では、富豪は寶庫に金銀の器具が夥しく積み重ねられてあつた。西班牙の如き國では財寶蓄積の習慣が、其頃より近世まで續いた。フリアス侯の沒した時の遺產は六十萬スコダの正金で、それが三箇の函に收められ、三人の娘に一箇宛婚姻持參金として分配されたとのことである。第十六世紀、第十七世紀頃になつても、西班牙では相變らず各種の金銀裝飾品を蓄へることが流行し、アルベルケルク侯の死後、其所有の金銀製の道具類を計量して、一々帳簿に記

載するのに六週間かゝつた。其中には小皿千四百打、大皿五十枚、中皿百枚食器棚用の銀の踏臺四十あつたと言ふ。又アルバ侯は富裕とは言はれぬ人であつたが、それでも小皿六百打、銀製大皿八百枚を所藏してゐた。西班牙に於ける財寶蓄積の熾んであつたことは、一六〇〇年フィリップ三世が、貨幣鑄造の爲めに、國中の金銀器を悉く徵收する勅令を出したのを以ても推測される。

西班牙人が第十六世紀になつてもまだ右の如く金銀の財寶を貯藏してゐたのは、頗る時勢後れの話で、其他の歐洲諸國では十二世紀頃に既に其風が止んで居る。無論貴金屬を尊重することは今も昔に變らぬが、其形式は同樣でない。即ち前には金銀塊を欲したが、後には貨幣としての金銀を欲するやうになつた。結局交換機關としての金銀を愛したのである。

斯くの如くにして黃金慾は變じて、金錢を愛することとなつたが、茲に不思議なるは、利慾の念の最も顯著であつた者は、猶太人に次で僧侶社會であつたことである。僧侶の貪慾に就ては大昔から記錄にも殘つてゐるが、第

九世紀頃、僧侶の高利貸に對する不平が宗門會議の問題に上つたことがある。又中世紀を通じて、僧侶の任命に金錢が大なる勢力を有して居つたことは著しい事實である。アルベルチは金錢に對して貪慾なることが當時の僧侶の通弊であると記し、法王ジョン二十二世に就て『彼には彼の過失があつたが、特に誰も知る僧侶に通有の過失を有してゐた。それは外ではない彼が貪慾で萬事皆金錢づくであつたことである』と評してゐる。

然し其頃の金錢に對する欲望の熾んなのは、啻に猶太人と僧侶とのみに限られずして、大概の人は實に此欲望に囚はれてゐる。金錢慾發生の最初は略、第十三世紀を界とする、少くとも獨佛伊等の進歩した國は左樣である。即ち獨逸の第十三世紀頃の詩人は既に金錢慾が一般の弊風となつてゐることを嘲り、道德家や教師等は口を極めて之を罵つてゐる。又ダンテが伊太利諸市の貴族及び中流人士の貪慾を痛罵したのも第十三世紀のことである。其頃の記錄に『彼等は利慾のみを思ひて、其慾心は彼の胸中に燃ゆる業火の如く、遂に其身を燒盡さずば止まず』と書いたものもあれば、又『上下、貴

賤、僧俗の別なく、唯是れ金錢を愛し、凡百の事物擧げて金錢の奴隷となり、怖るべき黃金慾は狂へる人心を驅つて、如何なる惡業も爲さゞるなからしむ。即ちそは智慮を鈍らし、良心を消磨し、記憶を弱め、意志を誤り、友情を忘れ、情誼を蔑にし、神を怖れず、恥を知らざらしむ』と痛言してゐるものもある。

第十四世紀のフロレンスも亦同樣の狀態で、富は善事なり、一切文明の必要條件なりとし、人民は擧つて射利を念としてゐた。即ち『何人も利慾と富貴を念はざるなく』、『何人と雖富を逐はざるはなし』などと評せられてゐる。

第十五、第十六兩世紀になつても亦同一の歎聲が耳にせられる。實に西歐諸國は一として黃金を尊崇せぬ處はなかつた。エラスマスは『百事金錢の奴隷たり』と長大息し、ハンス・ザックスは『金錢は地上の神なり』と悲しんだ。金錢の勢力は彌、加はりて、官職も購はれ、貴族は町人と婚を結び、多額の金貨を得んことを目的とする拜金主義は國家の政策となり、金錢を造る手段方法は、益、其數を加へ且つ狡猾となつた。

第十七世紀に入りて金錢慾は更に其度を加へ、之を悲しむ歌は依然とし

て伊、獨、蘭諸國より起つた。其頃和蘭語より獨逸語に飜譯された一諷刺詩が『金錢を得ることを賞讃して』と題して一七〇三年に漢堡及びライプチヒで出版された。其意に曰く、

黄金は藝術よりも、健康よりも、否々、生命其ものよりも尊い。それは當然の事である。愛錢の心こそは人類社會を築造するもので、結婚を整ふるも、條約を結ぶも、國家又は都市を建設するも、名譽と尊榮とを與ふるも、喜悅と快樂とを供するも、科學、藝術を進むるも、商業、煉金術、醫藥を發達せしむるも、皆黄金の力に依つてゐる。加之、金錢を得ることは哲學、繪畫、戲曲及び印刷師の技藝をも促進せしめる。否それのみならず、戰爭の技術も亦金錢を得ることに依り支へられる、コロンブスと共にイサベラ・フェルヂナンドが新大陸を發見したるも之が爲めである。最後に、愛錢心は永遠の救を得べき一助となる。錢を愛するは異端邪宗にあらずして、眞の基督教信者の爲すべき所である。否、啻にそれに止まらず、錢の愛こそ、總て一の女神である。

英佛兩國人は第十八世紀の初期に始めて蘭人同樣の經驗を得て、狂熱的

な黄金慾に浮された。爾來此狂熱は一昂一低常なかつたが、其感化は普く行はれ、此欲望は近代男女の心理の一部を形成するに至つた。

第三章　金錢獲得の手段方法

黄金慾と愛錢心とは上述の如くにして益〻熾んになつたが、それが直ちに資本家精神や資本家的企業を生じたのではない。近世資本主義の發生には餘程長い歳月を要してゐる。成程、人民は時代の進むに從つて彌〻財貨を欲する念强くなり、種々の手段を盡して金銀財貨を得んと努めたのは事實であるが、それが全經濟的活動に及ぼす影響は頗る輕小なものであつた。唯徒に黄金を得んことを欲して的もなく其日を送り、却つて肝腎の經濟活動を忘つた者も多かつたに相違ない。然し純樸なる農夫靴工は言ふまでもなく、商賣人でさへも日々の職業からして、富を蓄積し或は財寶を積み得ようとは、決して腦裡に浮べなかつたらしい。アルベルチの如きは商業上の經歴もあり、當時にありては資本家精神に富める人物であつたが、而も其錢を得る方法を論ぜるものを見るに、卸賣業の外には(一)寶の山でも掘り當てるか(二)富者の昵懇になつて其遺産分配になるか(三)高利貸をするか、さな

くば(四)牧場や馬を貸すのであるといつてゐる。第十七世紀の一文士は、富に達するの途は(一)王室に奉仕すること(二)兵士となること及び(三)煉金術の三つであると書いて居る。是等は近代人には滑稽至極に感ぜられるが、當時の實際を穿つた觀察で、富を成すには農工商よりも、是等の手段に依るが捷徑であるとして、盛んに其實行に盡したものである。

以上の外に富を獲る手段としては次の方法があつた。即ち第一は官途に就くことである。官吏になれば官金を誤魔化したり、賄賂を取つたり、又は何の彼のと役徳があつて財寶を蓄積することが出來る。第二には官職を購ふことで、是は最初に纏つた金を出し、之が報償として其官職に收めらるゝ、公納金や租稅等を自分に受取るのである。言はゞ一種の投資であるから時には最初に差出したゞけの金額も取れぬ場合があつた。第三は富豪の從者となることで、第十七、八世紀頃には隨分此手段で赤貧より巨富となつたものもある。第四は國家に金を貸すことで、第十七世紀以來漸次此方法に從ふ者が多くなつて來た。

然しながら是等の手段は孰れも資本家精神の發達に寄與するは愚か、却て其發達を阻害した。第十七、八世紀頃英佛兩國で行はれた舊式の所謂高等金融、即ち大富豪が國家に金錢を融通し、又は租稅引受人等になつて、富を爲したことなども上に述べたと大體同樣のものである。

處が尙、他に後に至つて資本家的企業の種子となつた金錢獲得の方法があつた。今其等を四部門に分つて少しく詳述しよう。

一　强力に依る金錢の獲得

玆に云ふ强力に依る獲得手段とは、官憲が不法の壓迫を加へて、租稅を徵收するなどとは違ふ。それは白晝の追剝の如きを指すのである。元來追剝は何國でも武士が好んで實行した一種の經濟的活動である。決して中世武士が偶然的に冒險を試みたといふ譯のものではなく、寧ろ一の社會的制度として英獨佛等で慣用された手段である。第十四世紀頃の記錄には獨逸特にライン地方に於て强者が弱者から追剝をするのは尋常事で、武士が往還で邂逅すれば、互に鬪うて殺し合ひ、旅行者は皆戰々兢々たる姿であつたと書いてある。或詩人は年若き貴族に勸めて、森林の間を徘徊して、財布の重い市民が通行せば飛び懸るがよいと告げたと言ふ。是は佛蘭西でも同樣であつた。伊太利や英吉利では是等强盜武士は、王領內の街道へ出掛ける代りに海上に志した。但し彼等の行動は大概組織立つた方法であるから、別に之を述べることとする。

二　奇術による金錢獲得

此方法は前者とは頗る趣が違つてゐる。即ち鬼神精靈を信じて、之が冥護に依り目的を達せんとするもので、病的な精神狀態からは斯樣な想像が種々構成せられる。抑、普通世人の黃金を得る方法に二樣あつて、其一はそれを探し出すこと、其二はそれを造り出すことである。平易に言へば寶の山でも探し當てるか、煉金術で黃金を造るかの二方法である。

寶の山を探すといふことは極めて古くから行はれた。蠻人襲來の當時より今日に至るまで、獨逸人は皆寶の山を探し當てんことを望み、十五世紀間の久しきに亙つて此妄想は遂うせられた。勿論昔は戰爭の際多くの貨

幣や金銀の器具や寶石等を地中に埋めた者であるから、之もまんざらの愚舉とは限らぬ。唯之を探し出すのに種々の魔術を用ひ、中には生涯到る處を發掘し廻つた者さへある。從來新しき土地が發見されて金銀は人の取るに任すとの風說が傳るや、妻子を捨て、工場は荒るゝに任せ、鋤鍬は畑の中へ擲つて當てもなく飛出した者が尠くない。第十九世紀末に於けるクロンダイクの砂金取り、一八五〇年頃のカリフォルニアの黃金熱は人の熟知する所であるが、是等と同じ狂熱は其以前幾度も起つたのである。第十三世紀のランメルスベルグ、第十四世紀のフライブルク、第十五世紀のインタール、第十六世紀の秘露、第十七世紀の伯剌西爾等皆同型である。第二十世紀に入りては稍思想が冷靜となつて、黃金王の驚くべき怪談や、日天子の黃金宮等の話を聞いても、發掘の野心を動かさなくなつた。然し今を昔に比ぶれば其本心に於ては依然として何等の差違もない。

黃金が掘り出さるれば結構であるが、若しそれが製造さるれば更に結構に違ひない。最初唱へられた煉金術は種々の理由で人の注意を惹いたや

うであるが、時の移るに從つて、此似而非科學は專ら黃金を造るを大目的とするやうになつた。第十五世紀以後に於ては、斯道の專門家は勿論匹夫野人まで皆此術を學んで身代を造らうとした。其熱は第十六世紀に至つて頂點に達し、煉金術の工場は宮殿にもあれば賤が伏屋にも設けられた。甚しきは寺院僧堂すらも、此流行に冒され、何れも煉金の竈を持たぬものとてない位であつた。斯かる有樣で、專門の煉金家は、四方に歡迎せられコロンや、維也納などの宮廷には、夫々御抱への煉金家があつて頗る高位を占め莫大の利得を獲た。但し其人物に至つては千差萬別で、中には無賴漢も少、數でなかつた。是等の御抱へ煉金家は次に述べんとする目論見人と親類仲間なのである。

三　目論見及び發明に依る金錢獲得

從來種々の目論見を立てゝ其計畫を望む者に之を賣るを職業とするものがあつた。目論見人又は計畫商賣人とも名づけられる。彼等は國會や宮廷や、其他貴顯紳士等の集合する場處に出入して其計畫を賣付けたが、中

には市場に出て其計畫を提供した者もある。

右の如き目論見商人が現れたのは第十六世紀以後で、フェルディナンド帝や西班牙のフィリップ王がベネヴェントといふ者に關係して居たと言ふ事實が傳はつてゐる。然し彼等が盛んに頭を擡げたのは第十七世紀以來のことで、英國ではダニエル・デフォーといふ人が、一六九七年に『目論見論』と名づくる書物を出版して、其事を叙してゐる。其言に據れば目論見術と云ふ變な商賣が彼國に入り込んだのは一六八〇年頃の事である。デフォーは當時を『目論見の時代』と呼び、目論見人に就て曰く、

彼等は常人よりも狡猾であるから種々の瞞着手段を講じて正直者を欺き、中には眞に發明の工夫をする者もあるが、概れ窮境に陷れば、奇蹟にでも救はれずば餓死する外なき厭ふべき輩である。若し彼等にして奇蹟を考へ出し損れたる時は、已むを得ず、何か非常なる大發明を思附きたる如く吹聽し、其特權を取り之を株にして賣出すを常とする。

と。又佛國でも第十七世紀の中葉より第十八世紀に亙つて英國同樣の流

行を見たが、佛人の氣性として、其遣り口は一層華麗で又一層芝居染みてゐた。而して彼等は意見の提供者又は事業製造者（ブラセール・ダフェール）と稱へられた。

第十七世紀中、巴里に集れる彼等は毎朝十時頃より株式市場邊を徘徊し、或は縉紳の客間を訪ひ、官吏の事務室にも出入し、上流淑女とも接近して其目論見又は發明の株を賣付けることに努めた。彼等の現狀は、憐むべき者が大多數であつたが、然し一つ當れば一攫幾百萬金と言ふのであるから、彼等の胸中は概ね希望に輝いてゐた。彼等は相當の理解力をも有してはゐたが、判斷力よりも想像力が餘りに進み過ぎてゐて、其計畫は隨分愚にもつかぬ、到底實行の出來ぬものであつても、殆ど數理的に正確な事のやうに說明した。又其意見（アヴイ）（計畫の）なるものも殆ど皆、其瞬間の思附きに過ぎなかつたが、而も之に對して多額の意見料を徵した。然し、中には公債償還に關してトンチン法を發案したトンチの如き有用な人物もゐた。一般に彼等は何處までも活動的、進取的、金取り主義で、其間には眞に發明の天才もあり、全くの夢想家もあり、體軀が弱くして頭ばかり焦つてゐるのもあれば、破帽弊

衣の破産者もある。一膳飯屋で食事しながらも、溝壑に轉ずるか、金融界の覇王となるか、一六勝負をやらうと言ふ大膽な冒險家も尠くない。此等の徒が佛國社會の一分子として認められたことは、モリエールの小說に出てゐるのでも知られる。

目論見人は墺地利其他の國々にもあつた。維也納朝廷に出入したカラットーの如きは、四十年間も之を職業としてゐた。又カグリヲストロといふ男は、歐洲の諸朝廷で歡迎されたが、大膽な奇想天外的の計畫を說いては紳富豪を魅し、一方には長壽藥、萬病丸、美人水等を賣り、巧みに上流淑女の手を藉りて多くの金を得て居つた。

彼等目論見人は後年のローベレール、レセップ、ストラウスベルヒ、サカルドの先祖である。今の會社發企人の元祖である。彼等相異る所は、其計畫や意見を提供するに止まつて、自分は事業以外に立ち、事業其ものに與る事業家であかつたことである。然し彼等の思想は資本主義を胚胎するものであつた。彼等の思想と企業とを結合すれば、其處に資本主義が生ずるのである。

四　金錢に依る獲得

金錢は唯之を所有するだけで其人を利益ある位地に置く。別に盜賊を働く必要もなければ奇術に依るにも及ばない。其金錢で更に金錢を儲ける手段も澤山ある。冷酷な性分なら金貸業も出來る。放膽の人物ならば投機的の事業をやるもよい。中世紀中から現代に至るまでに金貸業が資本家精神の形成に盡した二樣の役目がある。其一は金貸を職業とする者の胸中に特殊の傾向を生ぜしめたことで、是は資本家精神の發達に重大な關係を有してゐる。其二は金貸業は資本家的企業の一出發點であつたことである。（著者の「近代資本主義」參照）

又資本家精神の歷史に於て、危險を踏むといふことは少からざる影響を其上に及ぼしてゐる。賭博や富閥は別であるが、株式投機は第十七世紀中に始めて勢力を得、第十八世紀に至つて十分發達し、資本主義の膨脹に頗る寄與する所があつた。但し投機的活動が、資本家精神を直接に表現すると

言ふ意味からではない。投機的活動は其眞髓に於ては賭博や富籠と同樣少しも經濟的性質を帶びぬ。それは間接的に資本家精神の發達に非常な影響を及ぼしたのである。

投機の心理を知るには、和蘭で流行したチウリップ熱のことを話すのが一番明白である。一五三四年に有名な科學者バスベックは、アドリアノーブルから西歐地方にチウリップを輸入した。（チウリップは蘭に似たる葉を有し、小き蓮の如き花を開く球根草である。）然るに如何なる譯でか、一六三〇年頃になつて、之が非常に和蘭に流行し、我も我もと其球根を求むる樣になつた。嬾て人々が草花を得て樂しむの心は、之を販賣して利益を收めんとする欲望と變じ、玆にチウリップ熱を生じて、縉紳、卿士、商人、職工、水夫、農民、炭掘り、煙突掃除、僕婢の末に至るまで夢中になつて之を賣買した。如何なる町にも酒舖にもチウリップの市が立つた。一六三四年には和蘭國中の重なる市街は、チウリップ投機の爲めに正當の商賣が殆ど停止せられん計りになつた。富者は益〻富まんことを思ひ、貧者は俄に分限者たらんことを夢み、此草花の價

は奔騰して恐るべき高價となつた。彼等は斯樣な景氣が永續するものかの如く考へ、若し一度他國にチウリップ熱起れりとの報傳はらんか、全世界の富は悉く和蘭に集り、玆に新しく黃金時代を生ずべしとまで夢想した。當時二千五百フロリンの價ある土地が一箇の球根と交換された。或人は新しい馬車に二頭の馬に鞍を添へて、一球のチウリップと交換した。一六三七年に或町で孤兒院に寄附する爲め百二十箇の球根を競賣に附して、九萬フロリンを得たとのことである。

然しながら斯かる形勢が如何で永續しよう。其年の中に景氣は俄然一變し、信用は失せ、契約は破られ、破產瀕々として起り、富貴の幻影は煙の如くに消へ失せた。一週間前までは少し許のチウリップを所持して、相當の財產家たる事を喜んでゐた者も、今は憐な葱の如き球根を悲しげに打眺むるのみであつた。素より何等の眞價もないものであるから最早之を購ふに一錢を投ずる者もなくなつた。此和蘭のチウリップ熱は、猶一八四四年の鐵道株熱の如く、共に同性質の投機である。從年投機の目的物は株券に限らる

るやうになつたが、其後間もなく起つた佛國のロウ銀行、又は英國の南海會社の如き、何れも其投機たる點に於ては同樣で、チウリップ投機は大規模投機の最初のものなのである。

今是等投機の本質を了解するには、株券の事を別にして考へねばならぬ。元來株券とは何物なりやと言ふに、それは或事業の利益の一部に對する權利を與ふるものに過ぎない。されば、その豫期さるゝ利益に依て、株券の價値は定まるやうに見えるが、實際は然らずして、豫期の利益は株券の人氣を高むる餌に止まり、其根柢に横つてゐるものは冒險である。試に株券の投機を見よ、其豫期利益と其價格とは全然釣合つて居らぬではないか。一七一九年九月三十日に開かれた佛國のロウ銀行の總會は其一例である。初め其配當は公稱資本の一割二分たるべしとのことであつたが、それでは實際資本に對しては五分にしか當らぬ。ロウは此事實が知れ渡れば、其事業に挫折を生ぜんことを恐れ、表面四割の配當をなすべしと公言した。是は恰も實際資本の一割と三分の二に相當するのである。公衆は之に欺かれ

た。總會後ロウ銀行の株は騰貴し、八日の後に至つて一萬八千フロリンといふ最高點に達した。是れ實に群衆心理上の問題であつて、人々は熱に浮かされて宛然醉へるが如く、希望は一切の道理を沈默せしめ、心理學に所謂反射示唆の作用を生じたのである。

株式相場が奔騰し、熱度が上つて居る場合でも、又反對に沈下して冷へ切つて居る場合でも、投機熱は資本家精神の發展に關係を及ぼすのである。勿論賭博的行爲は資本主義の精神に依る經濟的活動を鈍らすのは事實である。例へば投機熱勃興の當時は、人々ごれに熱中して、株の高下にのみ氣を奪はれ、其本職を顧みないから、商工業は自から衰微するを免れぬ。然らば株式相場の投機は資本家精神と如何なる點に相關聯する所があるかといふに、之には二樣の答が與へられる。第一には、株式相場で投機の危險を踏むことは、結局發展して資本的事業家の企業となるといふことである。即ち賭博的情熱と勝利を喜ぶの情とは、進んで資本家的の冒險と變するのである。實際近代の資本家的事業を視るに、頗る賭博者的精力と情熱とを

備へて居る。第二には株式投機活動の進歩は、資本家精神の發達に必要なる氣風を助長することである。前にも述べた目論見の流行は、第十七世紀の末頃には歐洲全土を風靡し、後年の會社組織の氣風を胚胎した。然し、唯計畫することが流行したのみでは用をなさないから、それには株式相場の活動を相伴ふ必要があつた。株式相場の活動は計畫の實現に必要なる道程を與へ、又人の氣風を養つて目論見人の提供する所を受取らせるやうにした。

ダニエル・デフォーは當時に於ける最も明敏なる觀察者であつたが、彼は事業計畫と株式相場とが兩々相俟つて、遂に一世の通弊となつたと言つてゐる。

上述の金錢獲得の諸法は、其裡に何等企業の性質を帶びて居らぬ。然し時を經るに從ひ、金錢を愛するの念は企業と結合し、遂て資本家精神を產出したのである。

第四章　企業の精神

最も廣き意味よりすれば、企業とは熟慮されたる計畫を實行するもので、之を遂行するには單一なる意志の指導の下に、多數の個人が繼續して協力することを必要とする。

其計畫は熟慮されたるものでなければならぬ。故に突發的の行動は企業ではない。玆に數名の無賴漢ありて、途上旅客に遭遇し、其場に於て俄に之を脅す如きは企業ではない。然し兇漢の一群が、何月何日に相會して某の邸宅を襲ひて强盜を働くべしと熟議するが如きは、明かに一の企業的性質を帶びてゐるのである。

又其計畫は實行さるゝことを要する。唯計畫したのみでは企業とはならぬ。而して『之を遂行するには單一なる意志の指導の下に、多數の個人が繼續して協力することを必要とする。』故に如何に其計畫は熟慮されたものでも、單に一個人で之を遂行するものは『企業』とは言はれぬ。されば美術

其他個人の技巧に依る仕事は企業の範圍に屬せぬのである。又多數個人の協力になつたものでも、企業には或程度の繼續を必要とする。前の强盜の計畫の如きを普通企業視されぬのは此條件を缺いてゐるからである。最後に其計畫は單一なる意志の指導の下に遂行されねばならぬ。勿論此單一なる意志が一人以上の胸中に宿ることあるもそれは差支ない。例せば數名の友人が散歩の計畫をする如きは企業ではないが、阿弗利加遠征とか、クックの世界周遊旅行の如きは無論一の企業である。

以上說く所によりて明白なるが如く、企業は人間活動の全般に亙り、決して獨り富にのみ關係するのではない。經濟上の意味で言ふ企業は、企業全體の一部分に過ぎぬ。而して資本家企業は又經濟上の意味で言ふ企業の一分派に外ならない。

然らば企業の精神とは如何。他なし、そは一の企業を成就するに必要なる一切の心性を結合した結果である。此等心性は一方には企業家の遂行せんとする仕事の種類に依り、他方には其重要の度合如何によりて區別されるが、然し如何なる場合にも成功する企業家には三箇の必要な資質がある。(一)征服者たる資質、(二)組織者たる資質、及び(三)商人たる資質卽ち是れである。

一　征服者たる資質

企業を遂行するに必要な資格を擧ぐれば、第一には計畫を立て得ることを要する、卽ち事業に對する思想が無くてはならぬ。而して之には或程度の智力上の自由を有せねばならぬ。次には計畫を遂行する意志、卽ち實行の意志が必要である。發明者には此性質を缺いてゐるが、企業家は其發明した所を製造しなければならぬのであるから、計畫實現に就ての確乎たる決心を具備せねばならない。又第三に企業家は其計畫を遂行成就する能力を有することが肝要である。眞の企業家は征服者と同じく、其前路に横はる障害を悉く打破る、十分の覺悟と十分の强力とを具へ、之が爲めには他の一切を賭するだけの能力を要する。此點に於ては眞の企業家は賭博師に似てゐる。

二　組織者たる資質

企業家の從事する事業には必ず他の人々が彼と共に働き、又彼の意志を遵奉するを要するから、企業家たるものは特に組織者たる資格がなければならぬ。而して其所謂組織とは、多人數の仕事を組合せて、最も有效なる結果を生ぜしめ、又人や物を使用するに最も宜しきに適するやうあらしむることである。是は決して容易なものではない。一には人物の鑑識に長じ、多人數の中より適材を拔擢せねばならぬ。二には最大の效果を擧げ、最善の努力を致さしむる爲めに、適材を適所に配置せねばならぬ。三には其部下の一致的活動に齟齬を來さしめぬやう全部の機關の調整宜しきを得しめねばならぬ。獨逸の戰略家クラウゼウイッツは、理想的軍司令官に必要なるは、適所に其兵力を集合し、適時に之を用ひ得るにありと言つたが、企業家に於ても同樣である。

三　商人たる資質

然し以上の征服者的資質と組織的能力とを具ふるのみでは、まだ企業家

の資格は揃はない。卽ち彼は其雇人をして善く勤務に耐へしめねばならぬ。又彼は平和の手段を以て多人數を動かし、彼等をして不知不識の間に自家の利益となるやうに計らしめねばならぬ。遠征隊の隊長が蠻域を通過する時、其許可を得たり、或は食料品を求めたりするが如き、又資本家企業者が製品の賣捌を講ずる場合の如き、或は又政治家が通商條約を締結する際の如き、皆實に此資格を活用するのである。是等の場合に於て必要なるは所謂懸引で、それは他と談判するに當つて自家の强味を示し、對手の弱點を捉へ、對手をして其提議を承引せしむる手段を指すのである。懸引は畢竟智力の競爭に外ならぬ。

されば企業家は熟練なる談判者であり、取引人であらねばならぬ。然るに取引人は之を最も廣い經濟上の意味から言へば商人である。其處で商賣といへば物品でも、株式でも、資本でも、營業でも、總て懸引すべきものと言はねばならぬ。裏口で料理番と鷄肋の價を爭ふ貧困者も、田舍漢に古服を賣附けんとする古物商人も、南米國の代表者と外債の交渉をするロスチャイ

ルドも、米國諸鐵道會社に對して石油輸送運賃特別扱を談判するスタンダード石油會社の代表員も、米國産業史上最も驚くべき談判と言はれ、何十億弗かでモルガンに製鐵所を賣やうに、と懸合ひたるカーネギーも、共に孰れか商賣の事例ならぬはない。唯其差違は分量の大小だけで、事柄其ものは同一である。近代商賣の要素は總て懸引である。而して其懸引は必ずしも直接談判のみには限らぬ。例へば商賣人が公衆をして其品物を買はさせる爲めに種々の手段を盡すが如きも懸引である。廣告も矢張り其一種に外ならぬ。

懸引は何れの場合と雖、賣主又は買主をして、其契約の有利なるを確信させるのが目的である。而して公衆が斯く確信して、我も我もと其店へ出掛るやうになれば、其店主の理想は達したのである。興味を起させ信用を得、買ひたいと思はせるのが成功する商人の目標であつて、苟も腕力に訴へざる限り、其手段如何は頓着する所でない。而して之と同時に彼は示唆の働きを借りて、何でも早く買つて仕舞はう、早く取引を終つて仕舞はうといふ

考へを起させようとする。是等の手段こそは軈て商人の武器と言ふべきものであらう。

企業は素より豫測すべからざる事情に逢着することがある。されば、企業家は事情の變化に對應する能力を要する。之が爲めには、其心を沈着にして、適時に適事を爲すの技倆がなくてはならぬ。フリードリヒ大王は、大將たるものは一目で形勢を判斷するを要すと言つたが、實に軍の大將たる者は前にも述べた如く廣い意味の企業家なのである。

第五章　企業の起原

企業の精神は前に述べた通りであるが、其始めて發現したのは何時であるか、又それは如何なる種類のものであつたか。余の見る所では歐洲史上に於ける企業には四つの著しい形式があつて、各〻將來に感化を與へてゐる。即ち(一)軍事的企業、(二)莊園制度、(三)國家及び(四)寺院は是れである。左に如上の制度と企業的思想との關係を說明しよう。

一　軍事的企業

軍事的企業は無論最初の企業で、是が遂行されぬ限りは他の三つの企業は起らぬ。抑、軍事的企業とは首領が征略の計畫を立て、鬪士を率ゐて之を遂行することを言ふので、日耳曼諸種族が羅馬人の來襲を防禦した如きは此範圍外に屬する。之に反して日耳曼人が隊を組んで一統率者の下に遠征に出掛けたのは正しく軍事的企業である。それは群中に一人の傑出せる者があつて、群衆を其意志に從はしめてゐる。統率者と部下、又は主動者

と被動者との關係は、あらゆる企業に必要である。中世紀に於ける傭兵の首領の如きは、軍事的企業者の最好模範である。蓋しこは他の爲めに傭兵たるを以て職業とするの故でなくして、實に其首領の權力が大なる點に存してゐる。是等の隊長は最初は兇惡殘酷なる人物であつたかと思はれるが、時と共に彼等の能力は大に發達して、遂に兵士の稱讃を博するに至つたもので、歐洲近世史の初め頃に見る軍隊は、皆其大將の個人的勢力で團結されたのである。フランセスコ・スフォルザの如きは其適例で、彼は部下の氣受け極めてよく、而して其人氣を如何に利用すべきかをよく知つてゐた。

然し右の如き軍隊の首領が眞の企業家たるには、更に他の一資格が加つてゐた。即ち彼は其企業上の危險を引受け、多人數の軍器、被服、食料、宿泊等に至るまで、戰陣に必要なるものは一切之を供給するの任に當らねばならなかつた。要するに大將たる資格は、成功する企業家に必要なる資格と一致してゐる。讀者若しクラウゼヴィッツの『戰爭論』中、軍略上の天才と題する一章を見れば、必ずや思ひ半ばに過ぐるものがあらう。

二　莊園制度

莊園制度は中世紀中、歐洲諸國一般に行はれた制度で、非常の影響を各國民の進歩に及ぼしたものである。此制度は諸國大抵一樣であるが、それは羅馬の傳說や、基督敎の感化や、形勢自然の推移などの然らしめた結果であらう。獨逸に於てはタシタスの時代よりして既に莊園制度の傾向があつた。

莊園制度とは地主たる富者の階級が、他人の勞力に依て、大部分は品物で、其需要を充たした經濟組織である。此制度に就て、吾等の研究上主として興味ある點は、一の共同目的の爲めに、多數の勞働者を結合する必要のあつたことである。莊園制度が一の企業たる所以も亦此點に存る。而して其根本原則とする所は、消費上必要なるだけのものを生產して、其以上に出でぬと言ふにある。

然るに此目的を達するに當つて、完全な自由勞働者が居らぬ。故に强制勞働を用ふる外はなかつた。而して農夫は其土地に附屬したもの、土地に

束縛されたものであつて、地主は彼等から勞役を徵したり、又は物品を納めさせた。地主と農夫との間の詳細な關係は今玆に述べぬが、畢竟莊園制度の根本は一定の計畫に從つて、一團の人々が一定の働きをなし、而して或個人が之を支配すると言ふにあつた。それが漸次時代を經るに從つて、幾多の人爲的組織を生じ、其精神は後の資本家精神の發達を助長した。卽ち莊園制度は企業の精神を知らざる時代に於ける一の企業であつたので、中には頗る大規模のものも多かつた。されば莊園は後世大に發達した企業の種子であつた。

三　國家

近世の國家は平和と戰爭との二者の爲めにする一の企業であると言はば言ひ得る。何れの國家も然りとは言へぬであらうが、中世紀が過去つた時に生れ出た國家は無論左樣である。其理由は當時其等の國家を生出した精神を見れば明白である。

第十六世紀初頭に於ける歐洲の中央集權の專制國家を回顧するに、そは

一都會又は一地方等よりも遙に多數の人民が、其君主又は代表者たる一人の利益の爲めに其人の意志に服從した有機組織である。斯かる組織より生じた必然の結果は如何といふに、第一に人民をして君主の利益の爲めに盡さしめとんするには、其政府に一定の規定が無くてはならぬが、此規定は全人民の生活上に至大の影響を及ぼした。而してこれに依て兵力の集合を需め、許すべき行爲と、禁ずべき行爲とを明かにして、茲に大規模の政治機關を組織するに至り、其感化は非常に廣大で、他の諸種の小組織の模範ともなつた。

第二には臣民の總ての生活は、國家の利益に依て制限された。即ち國家は臣民個々の私事にまで干渉し、斯くして臣民一般をして企業の思想に習熟せしめた。國家は絶えず石を擊つて閃光を發し、それが漸次大をなして焔をなすに至つたのである。國家が其必要の爲めに企業の精神を養成し來つたこと、夫れ幾世紀の久しきに渉つたのであらうか。個人が此精神に感化され、又之を享受し來つたこと、夫れ幾許であつたであらうか。

近世國家の思想は第十三、四兩世紀に於ける伊太利の專制政治より發したものと思ふ。是等の專制政治は一定の理想に依て企畫を立て、思ひ切つて政府萬能の政治をしたもので、伊太利以外の諸王は殆ど夢想だもせざる程に專制の權力は發達し、茲に伊太利諸國は、一種の型の人物と組織とを產出するやうになつた。斯くの如き國家は確かに君主の個人的企業と見るべきものである。國王が政府の綱を操つるのは、普通冒險的企業家の行ふ所と敢て異らない。彼は何時誤つて落馬の危險に遭遇するかも知れぬ。從てその目的を達するに適當なる機關と方法とを求むるに汲々としてゐる。一言にして云へば是等の國王は、大規模の組織者で、其成功は一に其勇氣、練達、決意、及び執着の賜である。是等の思想は伊太利の專制政治より歐洲の大國に移り、斯くして專制君主政治時代は其儘繼續されたのである。

四　寺院

余が寺院を此表中に加へたのには頗る理由がある。蓋し寺院は國家に亞ぐ人類の最大組織であるのみならず、一般企業の如く一定の思想に依て

企畫されたものである。歴史に徴するに、寺院の指導者中より幾多の企業者が出てゐるが寺院經營の如何に組織の能力が必要であつたかを考ふれば是も亦別段不思議な話ではない。僧堂を建てたり、寺院の領分を作つたりするのは、畢竟紡績會社を創立し、銀行を組織すると同じ働きを要するのである。

第六章　資本家的企業の根本形式

本章に於ては、金錢の欲求と企業の精神とが合體して、資本家的企業の精神を胚胎するに至つた歴史を述べようと思ふ。元來此合體は種々雜多に互つてゐるから資本的企業家の種類も亦自から多樣に分れる。

今、資本的經濟を貫通する精神を了解せんとするには、其外形や機械的工夫を區別して考へねばならぬ。其等機械的工夫は、資本主義の最初より現今まで常に同一である。抑、市場に出すべき物品を生產するには多額の金錢を要する、之を資本といふ。機織をして原料を購はしめるとか、鑛山に新しき喞筒を備へつけるとか、其他百般の商工業の夫々其目的を達するには、何人かゞ其金錢を供給しなければならぬ、卽ち之が金融をするものが必要である。銀行の金錢は最初から預金で供給され、又商業會社や船舶會社の資本は、株券の引受、又は組合員の出資等で出來る。時には、企業家自身が資本的事業を起すだけの資金を貯蓄してゐた場合も無論ある。然し資本を

蒐集する方法が如何に相違しても、企業の精神其ものには何等の影響はない。蓋し企業の精神を決定するものは、其資本を利用する人であつて、企業計畫に對して資本を融通する人ではないのである。殊に資本の供給者は雜多の人から成立つてゐる場合が多い。是等の人が企業の精神を決定し得べき譯はあり得ない。

今、例を擧げて之を說明せんに、第十四世紀中ペルッヂ及びバルヂ商會が破産した時、僧侶だけの債權金額が五十五萬フロリンあつたと言ふ。又第十五世紀の末葉にアムブロシアス・ヘックステッテルといふ商人があつて、上は王侯、下は士農工商僕婢の末に至るまでも、之に金を預けたり、貸附けたりしてゐたが、其額は百萬グルデンに達してゐたとのことである。

又第十五世紀以來鑛山業の如きは、各種の社會階級及び內外各地から流入する資金を以て維持されたものである。一四七八年乃至一四八七年にゴスラルに於ける鑛山の坑道を擴張した時、其請負をしたのはクラカウの元老院議員ヨハネス・ツルッオや國外なるルーレンブルグ、シュムニッツ、及びラ

イプチヒ等の市民であつた。右のツルッオは又匈牙利の鑛業にも投資したが、同じクラカウ市民で彼と組合つた者も數名あつた。第十七、八兩世紀中墺國朝廷に對して、和蘭人が金を貸してゐたが、彼等はスメルニッツ其他の銅山にも資金を融通した。イドリアの水銀鑛に投資した者の中には、外國の貴族や、商人が隨分多くあつたが、ウィリッカの鹽山、シュラッケンスタルの鑛山及びコーンウォルの錫鑛等に於ても同樣であつた。

織物工業に於ても、或は資產を造つた職工や、富裕な商人又は卸賣業者などが其資金を調達した。又株式の少かつた時には、上流人士で商業に出資した者が、現今よりも遙に多かつた。佛國東印度商會が一六六四年に創立された時には、商人以外の出資者が少なくなかつた。又東洋會社の如きはメルレー侯を大株主として居つた。

右の如き事實であるから、資本を供給した人を捉へて、資本的企業の精神を發見する譯にはゆかない。又各種會社の株主の門地出身を調べて見ても、近世の資本家的企業の性質を知ることは出來ぬ。資本家企業の眞精神

を發見せんと欲すれば、是非とも眞の中心たるものを求めねばならぬのである。卽ち是等企業を組織し形成した人を見なければならぬ。

扨斯く見來つて企業家の形式を求むる時は、之に(一)海賊、(二)地主、(三)官吏、(四)投機師、(五)商人、及び(六)製造人の六種ある。

一　海賊

軍事的遠征は概して金錢が其最强の動力になつてゐる。然し軍事的遠征自體は必ずしも金錢上の利益を得る爲めの企業ではない。勿論古代に於けるフィニシア戰爭、羅馬とカルタゴとの西班牙征伐等は、黃金を獲るのを第一とした企業であつた。又中世紀に於けるボヘミア占領に關する戰爭及び近代の西班牙に對する戰爭の如きも、皆同樣ではあるが、然し是等を以て資本的企業の最も古い例と見るのは、恐らくあやまりであらうと思はれる。

然るに是等と異り最初より明白に利益を得るを目的として、其以外には何等の意味もない軍事的企業がある。例へば海賊の冒險の如きは、利得の

爲めに軍事上の熟練と組織とを利用した企業に外ならぬ。抑、海賊は中世紀時代より伊太利の海港に行れた制度で、アマルフィー、ゼノア、ピザ、及びヴェニス等は何れも海賊業の中心地となつてゐた。時には彼等が陸上强盜を併せ行つたこともあつた。以上の都府は皆此事業よりして其富の大部分を得、其海賊的遠征は、資本家的企業の最初の形式を示した。例せばゼノアでは、國家の監督の下に自己の利益の爲めに掠奪戰爭に從事する市民と、眞の海賊とを區別するのが困難であつたと言ふ。由來海賊と言ふ仕事は其頃別に不名譽なことと思はれてゐなかつた。是等の海賊船を艤ひ、又は其事業に關係するには、必ず政府の許可を得ねばならぬのであつた。ゼノアやピザの商人で希臘の海上に出沒して、海賊を働いたものも少くなかつたやうである。ビザンティン帝國の海軍は微弱憐むべきものであつたから、海賊事業は甚だ大袈裟に行はれたのである。是等の海賊は船隊を組み堂々として海上を荒して廻つた。

近世史の初めに於ては、西歐諸國は皆組織された海賊を一の職業として

認めてゐた。第十六、七兩世紀中には戰亂の絶え間かなかつたから一層海賊事業に刺激を與へた。卽ち往々にして義勇船が海賊に化したり、國家が屢、其等海賊の手を藉りて敵國と爭ふやうなこともあつた。第十六世紀中佛國では、其小貴族中(主に新教徒中)より海賊軍に從事すべき幾多の勇士を出したが、彼等はフォート・コリニーや又はラカロリーヌの慘劇の復讐として西班牙及び葡萄牙の通商貿易に危害を加へたのである。コルベルはダンカークの海賊船隊をして、ジャン・バールの指揮の下に政府の爲めに働かせようと企てたことがある。當時の報告書を繙けば、三十三名の船長が十五隻の軍艦と十二隻の三檣船を指揮したと書いてある。ジャマイカ及びハイチ附近に出沒して、西班牙諸植民地の海上を脅かしたのも亦佛國の海賊であつた。

然し第十六、七兩世紀中、最も代表的なる事例を擧ぐれば、英國と亞米利加の新英諸州とに於てゞある。第十六世紀の中半頃、英蘭及び蘇格蘭の海岸は是等の海賊船で充滿してゐた。一五六三年の夏、英國海峽に居た海賊船

の數四百以上に及び、數箇月間に六七百の佛國船を捕獲したとのことである。英國の歴史家は海賊が俄に澤山出現したのは、蘇格蘭女王マリーの迫害に因るので、其爲めに上流家族中より海賊の群に投ずる者も多く、其後エリザベス卽位の後に至つても繼續し、遂には漁夫等までも之に加はるやうになつた。英國西部海岸地方の紳士中、海賊事業に關係せぬは殆どなかつたといふ。是等の海賊船は富裕な者が其資金を出したので、彼等を當時紳士的冒險家と稱へた。海賊業は組織ある仕事で、最高地位にある貴族も、之に關係するを恥辱としなかつた。かの蘇格蘭女王マリー朝に於けるボスウエル侯やスチュアート時代のダービー侯、其他の貴族の如きは卽ち其例である。

亞米利加英領植民地も母國に倣うて、熾んに海賊を働いたが、殊に紐育州の如きは其最も甚しきものであつて、若し其證據がなければ殆ど信用されぬ程である。一七一七年にカロライナ州の海岸を巡航せる海賊船の數は千五百の多きに達し、其中八百はニュー・プロヴィデンスに其根據地を据ゑてゐ

た。第十七世紀には各植民地中、海賊事業と何等かの關係を持たぬものは殆ど一もなかつたとのことである。

海賊事業の一種として第十五世紀以來盛大になつたのは、土地發見の爲めの航海である。是等の航海は科學、宗教、名譽又は單純な冒險等の物質以外の動機から出たのもあるが、其最も强い動機―多くの場合に於て唯一の動機―となつたものは、利益を得んとする欲求であつた。實際是等航海の大多數は海外の土地を掠奪する爲めに、立派な遠征隊を組織したものに外ならぬ。殊にコロンブスが其航海に於て砂金を發見したと報告して以來何れの遠征隊も、言ふと言はぬとに論なく、皆黃金鄕（エルドラド）を志してゐた。

寶庫を掘り當てようとか、黃金を製造しようとかいふ迷信は、茲に至つて鋤鍬で黃金を掘り取るに委せるやうな新しい土地を發見せんとする熱望と結合したのである。

然らば是等の遠征隊を率ゐてゐたのは如何なる風の人々であつたかといふに、彼等は勝利を信じ、猛烈多慾で、如何なる障礙物も悉く之を征服せず

んば已まざる剛健な冒險家であつた。當時に在つては此種の人物は隨處にあつたが、殊に第十六世紀には英國に最も多く存して居た。彼等はフランセスコ・スフォルザやシーザー・ボルジアの如き伊太利賊兵の首領に似た人物であつた。然し彼等は黃金や財物を獲得するのを主なる目的としてゐたから、其等伊太利人よりも、一層資本家的企業者に近いものであつた。彼等は冒險的空想に充ちてゐたと同時に、非常な活動的精力を有して居た。架空な妄想を描くと共に、現實に對しても炯眼であつた。彼等は或時は海賊船隊を指揮し、又或時は政府の高地位を占めた。今日は掌の痛さを忍んで寶庫を掘り、明日は世界歷史を著述したりした。彼等は生活を喜ぶの情燃ゆるが如く、驕奢を愛して已まなかつたが、而も何等確たる目標なくして、數箇月間の航海の苦痛を忍び得る人々であつた。彼等は一面に最大なる組織力を有しながら、他面に幼兒の如き迷信を懷いてゐた。彼等こそは實に今日の資本家的企業家の先驅と稱し得られる。彼等の中第一に指を屈すべきは「大ラレー」と呼ばれたサー・ウォター・ラレーである。彼は「軍神と黃金神

との二種の神に齊しく仕ふ』と言ふのを其格言とした。其他フランシス・ドレーキ、マルチン・フォルビッシャー、リチャード・グレンヴィル、カヴェンディッシュ等も皆同類であつた。

今是等の征服者や強賊等を資本主義の引合に出した理由は、彼等自身が資本家的企業者の一種であつたと言ふ爲めではなく、寧ろ彼等の内にある精神が、第十八世紀の中葉まで行はれた貿易植民の精神と同一なからである。兩者は等しく冒險征服の遠征家であつた。冒險家から海賊又海賊から貿易商人と進化する間に截然たる區劃を設くることは出來ぬ。ゼノアの市民は各自邸に塔樓を建てゝゐるが、それは一旦内亂起らば、是等塔樓の砲門を開いて、忽ち修羅場を現出するためであつた。是等市民は海上の主人公であつて、巨船大舶を造り、遠隔の地方に出掛けては、掠奪を恣にし、獲物を山積してゼノアに歸航した。斯かる人々は果して海賊であるか、又は貿易商人であるか殆ど區別されない―卽ち兩者を併せ意味して居るのである。

又地中海東部海岸地方に於ける貿易を見るに、衝突や戰爭は實に其大部分を占めてゐた。外國の土地で其地位を造り上げるのには、其人が戰士であるか、或は戰士の助けを藉るか、或は又國家の組織された力を借りねばならなかつた。第十六、七兩世紀の英國の船舶商人の如きは、好恰の事例である。ション・ハウキンス等の事蹟を見るに、そが發見者であるかと思へば、軈て政府の役人であり、海賊であつたかと思へば、正當な貿易を營む商船の船長であつた。

此種の企業的人物は獨逸にもあつた。ヴェネズエラへ往つたウェルゼルの遠征隊の如きは其一である。そは發見の爲めの遠征であつたか、植民の目的であつたか、剽掠を主とした企業であつたか、又は普通の通商的企業であつたか、頗る人をして了解に苦しましめる。又マシリッヒに航行したウルリヒ・クラフトの冒險的經歷は殆ど神仙譚のやうであるが、彼は商人であつたか、又は一箇の冒險家に過ぎなかつたかとはいはゞ、誰も返答に躊躇せざるを得ない。

是は佛蘭西でも同樣で、佛語の armateur（アルマツール）は船舶商人と海賊と兩樣の意味を存してゐる。第十六世紀中ヂープ、アーブル、ルーアン及びラロシェルの諸港より阿弗利加や、亞米利加等へ大船を出したのは、船舶商人たり、兼ねて海賊たる連中であつた。是れ軈てアルマツールの一語にして兩樣の意味を併せ有する根源である。

近世の時代の進むに從つて漸次大きな貿易植民會社が起つたが、之と比較すれば初代の通商は如何にも單純な海賊行爲に類してゐる。中世紀に於ける伊太利の貿易會社は既に其兆候を示してゐたのである。就中、ゼノアの有名なチオス會社は一三四七年に設立され、二世紀間チオス島を初めプオシア、サモス、ニケーア其他の專制權を有したのであるが、此會社は特權を與へられた海賊の團體に外ならぬ。其起原に就ては興味がある。即ち私人の一商船隊がチオス島を占領してゼノアに歸來するや、船主等は政府に向つて其勞力に對し二十萬三千ソラの報償を與へよと要求した。然るに政府は財政が許さなかつた爲め、其代償として一三四七年にチオス會社を

設立せしめ、上記の土地支配の特權を彼等に附與したのである。

第十六、七兩世紀中の大貿易會社は右のゼノアの會社と同樣に國家の權力を以て其後楯とし、之に主權を附與した半軍事的の征服的企業であつた。故に或は語を換へて之を永久に組織された海賊團體とも言ふ。第十七世紀に入りて後も、是等の會社は、舊式の海賊を最も主要の業務としてゐた。例へば和蘭西印度會社の如きもそれで、一六二三年より一六三六年の間に四百五十萬ソリを支出して八百隻の船を艤裝したが、其捕獲した船舶は五百四十隻に達し、貨財六百萬リラを掠奪した。加之、別に葡萄牙人から三百萬リラを鹵獲したから、會社は多大の利益を得た譯である。是等貿易會社の收支會計簿に『私掠利益又は損耗』幾許などと記入してあるのは普通のことである。

又是等會社と土人との貿易の如きは、畢竟薄い假面を被らせた盜賊と等しく、當時の歐洲人對野蠻人の物々交易は、實に强制貿易と言ふべきものであつた。そが土人の心裡に絕望又は激怒を感ぜしめたことを見ても其貿

易の性質は了解される。モラッカ島の土人は、香水が原因となつて甚しき慘酷な苦痛を見るに至つたのであると言つて之を投げ棄てた。彼等は又屢、強制者の頭上に復讐を試みたもので、斯かる場合には歐人は何時も其城壁の中に遁げ込まねばならなかつた。ハドソン灣會社の記錄中に、『夜は固く城門を鎖さゞれば晝間平和の交易をなしたるインディアンが城中に襲ひ來りて商人を殺戮する虞れ大に是れあり』と書いてあるが、植民地貿易の初めは概ね斯樣な有樣であつたと言はねばならぬ。總ての會社が武備を修してゐたのも、全く右の如き場合の少なくなかつた證據と言へる。此武備と雖決して輕易なものではなかつた。卽ちタナにあつたヴェニスの商地には、城壁、城塞、天主閣及び刎ね橋等を設け、要心極めて堅固であつたといふ。ベンガルにあつた和蘭人の商地も城砦の如く、周圍には水滿々たる濠を廻らし、城壁高く櫓を設けて其處に大砲を据えてゐた。一七三四年に於ける英領諸植民地の兵備を見るに、ジャメーカでは白人總數七千六百四十四人に就き、要塞六箇所、兵士三千人を有し、バルバドーズには居住白人一萬八千二百

九十五人、要塞二十一箇所、大砲四百六十三門、砲臺、二十六、義勇兵四千八百十二人あつた。又リーウァド島では一萬二百六十二人の白人中、三千七百七十二人は義勇兵であつた。

當時の海上貿易が好戰的掠奪的精神を有してゐたのは、是等企業の先頭に立てる人士が好戰的人物であつた爲めである。彼等の中には、國內の軍隊に入るべき餘地がないから、其武勇を外に漏さんとした貴族も少くなかつた。されば英國東印度會社の如きは、餘程後に至つて其航海の重要な役目には右の如き紳士を使用せざることを決議し、全く實業家のみを以て活動せんと欲した。和蘭人の諸會社すらも當時は好戰的傾向を免れなかつたのである。其指導者等は同じく英雄兒又は冒險漢であつた。和蘭東印度會社歷代の總督の肖像を見るに、其多くは(殊に第十七世紀時代の人物は)毛織物商人と言ふよりも寧ろ峻嚴敢爲な武將の面影を示してゐる。

之を要するに、近世初期に於ける通商植民の企業の精神は全く海賊私掠の精神と異る所がなかつた。ゲーテは『戰爭、貿易及び海賊の三者は、區分す

べからざる一體なり』と言つたが、蓋し實際を言表はしたものである。

二　地主貴族

地主制度は其本質上必ずしも資本家的のものではない。それは猶軍事的企業が必ずしも資本家的でないと同樣である。元來、莊園制度は其本質に於て利益を目的とせず、長期間人々の日常生活の欲求を滿足させる爲めの經濟組織に過ぎなかつた。然るに時と共に變化して、地主貴族等の家事經濟は漸次狹まり、之と相竝んで利益を得んとする經濟組織起り、そが徐々として而も確實に、資本家經濟的性質を帶ぶるやうになつたのである。卽ち地主は利益を得る目的で勞働者を一定の組織の下に置き、其有する生產の要素を結合して、之を生產の用に供し、其結果玆に各種の資本家的企業を生ずるに至つた。

然るに當時の企業はまだ半封建的であつた。蓋しそが總て單に社會の欲求を滿足させるだけしか生產せぬと言ふ經濟的性質を脫却して居らぬのと、其範圍が甚しく局限されてゐたとの故である。卽ち當時の企業は地

主の財產に依て制限せられ、資本家企業の自由に膨脹するのを牽束した。第十九世紀の初めに於てすら、シレジアの鑛山では、地主が鐵鑛山を所有してゐて、其地主は他に用途のない餘分の材木を用ひ竭すだけしか掘らなかつたのである。

且つ其等の企業は其目的を達する手段の點より見るも、尙、半封建的であつた。當時は人を使役するにも貨財を捌くにも、自己の利益を計る上にも矢張國家の權力を以て萬能の勢力とする考へが行はれた。さなくとも賣買や取引の上に國家の權力が悉く間接の影響を與ふるものと解せられ、總ての特權を許可するのも是皆國家の權力に在るとされた。此故に一部分は資本家的であり、同時に他の一部分は封建的なる一種の企業が生じた。卽ち有力なる貴族等が、中等階級や貧乏な發明家などと協同して、利益を獲得せんことを計つた。詳しく言はゞ、貴族は所要の特權や自由を供給し、他の者は金錢又は技術を提供して組合を作つたのである。此種類の組合は、第十七、八兩世紀中、英佛兩國に頗る多くあつた。

地主や貴族や士族の企業は、初期の資本家的企業時代に於ては、普通に考へられて居るよりも、遙に重要なる役目を務めたものである。別に統計上の證左がないから、其資本家的企業の進歩に向つて如何程の影響を及ぼしたか明細に示す譯には往かぬが、今貴族が組合つてゐた資本家的企業に依て瞥見すれば、大略之を測知することが出來る。第一は資本家的農業で、是は地主が先づ開始したものであるが、第十六世紀から第十八世紀へ掛けて、英獨兩國共に幾多の例がある。然し貴族は農業以外の產業にも手を出し、特に鑛業の如きに對しては極めて熱心であつた。是等貴族は鑛山採掘料を取つたのみでなく、自ら鑛業に從事した。而して其如何に廣く行はれたかは實に驚くばかりで、之を以ても資本家企業の特徴を知ることが出來る。左に其數例を掲げよう。

第十五世紀中、英國のダルアムの僧正がウェアデールのベドバーンに鎔鑛所を所有してゐたが、それは資本家的組織になつてゐて、使用人數も頗る多かつたやうである。一六一六年に或朝臣はペン製造人の組合と契約して、

之に自己所有地から出る金屬を供給してゐた。又一六二七年にダークル卿は新方法に由る鋼鐵製造の特許權を得た。更に又他の例を擧ぐれば、第十六世紀以來地主の中には自家所有の鑛山より出る錫鑛製造工場を所有地内に設けたものがあつた。一六九〇年には貴族や士族數名で鑛山冒險組合の設立を助けたことがある。石炭坑業も亦同樣に多數の貴族が之に關係してゐたが、第十八世紀に於ける英國殊に蘇格蘭炭山の勞働者の狀態は甚しく封建的の風があつた。

更に佛國を見るに是れ亦同樣で、鑛業中心地の一なるネヴェル州の諸鑛山は、第十八世紀に入りて後も、地方の地主貴族の所有であつた。又ビジー卿は其土地で鑛山採掘の外に鎔鑛所をも設けてゐた。是等の多くは第十八世紀に入つて後、巴里の富豪銀行家マッソンの所有に移つた。フランシュ・コンテにも澤山の鑛山があつたが、皆舊貴族等の所有する所であつた。

鐵製造に就ても同樣に、地主等が多く之に關係して居つた。卽ちエフ・イ・ヂー・ブルーメンスタインといふ貴族は、一七一五年に其城廓附近に製鐵

所を設けてゐたし、又ショアセール侯は其頃鋼鐵の製造所を起して居つた。然し佛國の貴族が特に多く關係したのは石炭鑛業であつた。ヘンリー二世はフランソア・ヴ・オ・ロックと呼ぶ貴族に炭山採掘の全權を附與したが、此權利は轉て他の貴族に轉々した。其後ルイ十四世はネヴェルを除いて佛蘭西全國に於ける四十年間の採炭專權をモントウジェー侯に與へた。其次の代に至つて攝政王は貴族等の組織してゐる或會社に同樣の特權を授けた。然るに是等の貴族は獨り石炭採掘權を有してゐたのみならず、實際の採掘事業にも直接指揮を取つて居つた。例へばルイ十四世の朝にノアイエ侯はブルノンヴィユで炭坑を開き、オーモン侯、イーゼー伯及びメーエレー侯等も亦夫々採炭事業に手を出してゐた。而して右の如く貴族が自家の所有地又は其他で採炭の特權を得ることは、第十八世紀の後半に至つて益々多くなつた。

獨逸及び墺地利に於ても同樣に最初の鑛山企業は貴族が營んだものである。イドリア水銀鑛山に關する一五二〇―二六年頃の記錄を見ると、オ

ルデンブルク伯ガブリエルとかベルナルド・フォン・クレスとかトレントの僧正などといふ貴族の名が澤山に出てゐる。一五三六年、一五五七年、一五五九年、及び一五七四年等の記錄も其通りである。其後には漸次商人の姓名が多く加はり、中には全く貴族の名の出てゐないものもある。然し實際には於ては封建の精神に支配されてゐたので、地主たる貴族の影響は千態萬樣に其勢力を示してゐる。

獨逸鐵鑛業が資本家精神を備ふるに至つたのは全く貴族の賜である。ストルベルク伯は第十六世紀中鐵工業で有名になつたので、伯はケーニヒスホフに製鐵所を設け、イルゼブルクを製鐵所の中心地たらしめた。又初めて同地に製銅所を建てたのはウォルフガンク伯である。ユリウス・フォン、ブラウンスユワイッヒ、ルユネブルク伯は前者の强敵であつた。ハルツ山中にあるギッテルトの製鐵所には、一五七三年より一八四八年に至る收支會計簿が殘つてゐるが、之に據ると如何に貴族の勢力が著大なりしかゞ明白である。スチリアに於ける鐵鑛業も同樣で、シレジアの諸鐵山の如きは現今に至る

まで、其地方の貴族の所有になつてゐる。

最後に瑞典を見るに、鐵鑛業は農業の副業であつて、地主たる貴族は鑛業の爲めに鑛夫は勿論農夫をも使用した。今日鑛業と農業とが各〻獨立した産業になつてゐてさへもダンネモラでは舊態を繼續してゐる。

鑛業に關しては以上に止め、次に機織業の事を述べんに、是れ亦貴族の勢力が矢張り甚だ著しい。英國に於ける毛織物業の歴史を見るに、大きな羊牧業者で自分の手で採つた羊毛を以て自ら毛織物業を開いてゐるものが少くない。絹織物等も亦多く是等農業者の手で行はれた。然るに一六八九年にはアシュトン卿ウォルターが、ミッドルセクス州セント・ゼームス附近で桑園を得て、桑を栽培し且つ養蠶することを許されたといふことがある。佛蘭西でも之と同じく、地主は毛織或は絹織の機を所持してゐた。第十八世紀中クーランクール侯はモスリン及び絹製窓掛の工場を建て、ルーヴァンのクール侯はリンネル織物工場を起し、シュアセル・グフィエ公夫人は紡績工場を設けた等の例が澤山ある。實に第十八世紀中佛國の貴族にして織物業を

開いたものは頗る多數に上つてゐる。

第十八世紀に於て産業の發達に貴族が大な勢力を及したことは、ボヘミアを以て好例とする。此國ではヨゼフ・キンスキー公を主として其他幾多の貴族が盛んに工場を建てた。又貴族が好んで手を出した他の産業は玻璃製造であるが、是は其所領地から伐り出す木材が利用し得られたからであらう。佛蘭西では玻璃製造は殆ど貴族の專業で、平民は特別の許可を受けるか、又は既設の組合に加入するかしなければ、之を營むことが出來なかつた。其他の諸國でも皆略、同樣である。

要するに歐洲の經濟史中には、幾多の點に於て、地主たる縉紳者流が、資本主義の進歩に寄與した所が少くないのである。されば地主たる貴族縉紳を目して、初代資本家的企業者の一の典型なりとするのは至當であらう。殊に植民地々方の資本主義が、大部分封建的性質を帶びてゐたことを記憶すれば、此點は一層明瞭になる。伊太利人は地中海の東海岸に植民したが其經濟組織は封建的のものであつた。卽ち其多くは唯主人公が變つたと

言ふだけで、土耳古人の地主の代りに伊太利人が來たに過ぎない。市街地でも、村落地方と同樣に各自の分割所領に屬し、總て奴隷勞働を基礎とした。

西班牙人や葡萄牙人の亞米利加土人に對するも亦同樣で、彼等は封建的の地主、貴族を以て自ら任じ、住民は自分の支配の儘なりと考へてゐた。最初は封建風に勞働者を取扱うたが、後に至つて全く奴隷制度と化した。而して資本家的精神を以て其所有地で事業を營んだ鑛山主や耕主等は、實に舊式の封建貴族であつた。

北米合衆國の南部諸州に於ける最初の企業家も亦之と少しも異ならなかつた。例へば一六〇六年に設立された倫敦のヴァヂニア會社のデラウエア卿の如き、マリーランドの『設立者』と言はるゝボルチモア卿の如き、カロライナ州を取つた八人の地主、就中アルベマール公、クラレンドン侯、ウィリヤム・バークレー及びシャフツベリー卿の如き、何れも皆奴隷勞働を基礎として封建的企業を試みたもので、米國南北戰爭當時に至るまで、南部諸州の資本家的耕地が、半封建的性質を帶びてゐたのは卽ち其實證である。かの商業的

精神を『南部諸州紳士』が遵奉する所となつたのは、僅に南北戰爭後のことに過ぎない。而して此時始めて、農民や商人や工業者や自由勞働者の間に、强制と習慣とを基として、大地主耕地（グランド・セーラヨル）制度を建設する風が終熄したのである。

三　官吏

近世の國家が層一層黃金と金錢とを得るを以て目的としてゐるのを見れば、之を一の巨大なる資本家企業と認めても差支あるまい。西班牙人の發見、征服及び印度の貿易等は、國君等の欲望を益、熾んならしめた。然し以前よりして、政治家は絕えず黃金蓄積の問題に苦心してゐたのである。それは或時には國家の費用を充たす爲めであつたらうし、或時には經濟上の進步を講ずる爲めであつたかも知れぬ。何れにもせよ、問題は同じ事である。コルベールは重金主義の政策を採つたが、其言に曰く、『一國の强大なる度合を定むるものは、一に國內に存する黃金の分量に依る。是れ世人の一致する所たるべきを信ず』と。此語の中にて『黃金』の文字に換ふるに『利益』の二字を以てせば如何。それは軈て總ての資本家企業の第一原則となるの

である。次に國君及び其臣下たる官吏等が、資本家的企業の精神を活躍せしめた事實を擧げて、彼等が近代經濟界の最初の代表者として、重要なる役目を務めたことを述べよう。

瑞典王ガスタ・ヴァス・ヴァサは、同國有數の企業者であつた。彼は自己の王室の爲めに、瑞典の鑛山を開發したのみならず、外國と通商條約を締結し、保護關稅を設け、且つ自ら大規模の貿易に從事して、國中の商人に其範を示した。舊政時代の名君は皆斯樣な風で資本的事業の創立者であつたものが少くない。而して中には企業的精神の源泉が國王其人に存してゐた場合も頗る多い。現に獨逸には若し國君が適當の機會に出現して、鑛山の荒廢を救はなかつたならば、多くの鑛業が中止の已むなきに至つた例がある。卽ち今日のルウル地方に於ける鑛業史を繙いても此事實は明白である。

抑、國家の企業は資本主義の發達上、極めて重要なものであるが、其企業の性質も亦同じく重大である。一般に國家企業は大規模なるを常とするので、資本の蓄積がまだ大きくなかつた時代に在つては、國家にして初めて莫

大なる資金を投ずることが出來た。實際國家にして初めて企業を創辦し得るといふやうな場合も多かつた。海陸の運輸交通に關する企業の如きは、其一例であつて、第十九世紀以後に於ても、背後に國家の力があればこそ是等の企業は成立し又發達したのである。

國家は又是等の企業に必要な機關を備へて之を使用することが出來る。企業の初めには如何なる種類のものでも其事業に熟練した人物が乏しい。此點に於て國家と個人的企業者との間には殊に著しい差がある。國家には常に立派に行政機關が備つてゐるが、私人の企業者は先づ此機關から拵へてかゝらねばならぬ。

加之、國家企業は大なる將來を有つてゐるのである。將來の計畫を立てるのは君主に若くものはない。遠く謀つて計劃を立て、不斷に精力を之に注ぐと言ふことは、總ての資本家企業の特色であるが、此特色は二つながら實に國家的事業の性質其ものから生じたものである。又是と同じ理由で獨創的思想、該博なる知識、及び科學的訓練等に於ても、亦國君に若くべきも

のはない。高位高官の會議には時の人材が雲の如く集つてゐる。之を除外して何處にそれだけの材能が得られよう。第十八世紀以前の佛國に資本家企業者としてコルベールの右に出たものがあつたであらうか。又フリードリヒ大王時代の普魯西に於て、當時上部シレジアに國有鑛業所を建設したフライヘル・フォン・ハイニッツに比肩すべき企業家があつたであらうか。

然し時代の進むにつれて、國家企業家も漸く弱點を示すに至り、所謂御役所風を馴致して其行動も遲緩となり弊風百出するに至つた。

四　投機師

投機師も資本家企業者の一形式であるが、それは彼が投機的企業の組織者となつて、茲に初めて資本的企業者の一となるのである。即ち最初彼が目論見を立てただけでは未だ企業者とは言へぬ。彼が其目論見を實行するに必要な方法を得て一換言すれば目論見と實行と相俟つて資本家企業者たる資格が備はるのである。第十七世紀の末葉よりして斯かる企業者が漸次生じて來た。即ち其頃の目論見人が金融業者から歡迎され、各種の

株の募集が行はれた。之を名づけて投機的企業と言ふ。デフォーは彼一流の筆致を以て次の如く言つてゐる。

種々の發見や發明をふれ立てゝ非常な利益が得られるやうに油を掛けると、之を眞實と思うて盛んに空想に耽る連中がある。而して其空想の生んだ幻影を基礎として會社を組織し、委員會を選び、役員を任じ、株を募集し、實は空なものの爲めに資金を投じさせる。而して發明者はそれをば宜い加減に操つてゐるが、愈自分の權利や持株等を悉皆賣拂つて仕舞へば、後は野となれ山となれで、迷の雲の消散するに委せる。後に殘つて其株を買つた者等は、何の彼のと仲間中で爭論を惹起し、揚句には裁判沙汰にまでなる。斯くして株は當初はずり〳〵と下落するが、然るべき時分に見切りを附けたものはまだしも仕合せで、若しそれを惜んでゐると、遂には總一文の價もなくなる。其結果數多の家族が零落に陷つた實例は到る處にある。

其時代殊に第十八世紀の初頭十年間は、大規模な會社發起時代であつた。著者の知る所では、資本家的企業の創設の風が傳染病の如くに流行したの

は、其頃が最初であつたと思ふ。それは特に英佛兩國に甚しかつた。卽ち當時は實に『南海泡沫會社』や『ロウの銀行計畫』等の時代で、是等の巨大なる事業の周圍には、幾多小規模の計畫が簇生しつゝあつたことを忘れてはならぬ。

此時代は人類の眼界に忽然として新世界が現出したやうなものであつた。當時の會社發起が如何に手廣く行はれ、且つ如何に錯綜してゐたかを概觀すれば、略〻事情に通ずることが出來る。其當時の政府の調査報告書には是等に關する種々の材料が記載されてあるが、一七八七年出版のアンダーソン著『商業起原考』では、

一七二〇年は驚くべき狂言的の目論見、計畫、及び企業が、全盛を極めた年で、歷史家の特筆すべき現象である。後の政治家たるものは宜しく之を觀察して、其弊風を打破し、世人を瞞着することなからしむるを要す。

と說いて、其時代の景況を叙述してある。今其大略を左に轉記しよう。

英國で當時最大な注目を惹いた問題の焦點は南海會社である。其特許

狀には『プローカ河』より、チェラ・デル・フェゴの最南端に至る亞米利加の東岸及びホーン岬より以北の西海岸に於ける貿易の特權を與へると規定してあつて、例に依て其活動區域の主權も附與されてゐる。然し斯かる南海會社の特徵は、其計畫が一の投機的企業たる點にあるのではなくして、寧ろそれが他の多くの投機的企業を喚起した點にある。當時の慣例に依て、此會社は多額の國債を受入れて、遂には其持分は三千壹百萬の多額に上つた。然るに國債は從來所謂『金緣』（ギルト・エッヂ）の證券で其利率は確然一定してゐるが、會社事業は其配當素より時々變化するものである。而して一七二〇年に至つて南海會社の重役は、買收、申込等の手段で、國債を吸收する計畫を遂行しても宜いと言ふ許可を得た。茲に於てか富者階級は投機に狂熱を帶ぶるやうになり、會社の株は拂込百磅のものが、一千磅を唱ふる程に騰貴した。一度賭博的流行が激しくなるや、之に乘じて幾多の目論見人は、無數の企業を起した。主要なる會社及び株式騰貴の狀況を示せば左の如くである。

	（拂込金額）	（一七二〇年の最高賣買價）
百萬銀行	一〇〇、〇〇〇磅	四四〇磅
ヨーク建築會社	一八〇、〇〇〇	三〇五
光澤織物會社	一五二、〇六〇	一三〇
英國銅會社	一五〇、〇〇〇	一〇五
威斯銅會社	一四二、〇六〇	九五
王立漁業會社	一〇〇、〇〇〇	一五
ドグラス河浚渫會社	一五〇、〇〇〇	七〇
リヴァプール清水會社	一〇〇、〇〇〇	一〇
テムプル・ミルク眞鍮會社	一〇〇、〇〇〇	二五〇
漢堡會社	一五〇、〇〇〇	一三〇
オークネー漁業會社	二五〇、〇〇〇	二五〇
火災保險會社	〇二六	八

此外に漁業會社十二、鹽鑛會社四、保險會社八、送金會社二、水道會社四、砂糖

會社二、米國諸地方にある貿易會社又は植民會社十一、建築會社十一、農業會社十三、油會社六、港灣河口改築會社四、倫敦市内の調達會社四、亞麻製造會社六、綿會社五、金屬鑛山等の會社十五及び資本金二百萬磅の倫敦道路掃除建築會社、同三百萬磅の製菓會社、永遠動力發見會社、製紙會社、『かもじ』の會社、貧民使役會社等があつた。一七二〇年一年間のみで發起された會社の數二百に達したが何れも皆泡沫會社ならぬはなかつた。

今投機的の資本家企業を上述の三箇の企業に比較すると、其思想に於て又其手段に於て頗る性質を異にしてゐる。三者が外部の勢力又は壓力を基礎としてゐる點は同樣で、是等企業の指導者は、何れも皆其强力を藉りて自家の計畫を遂行するのである。然し海賊强盜の場合にあつては、强力を以て第一要素とし、地主貴族や政府役人の場合では强力は第二位に置かれる。投機師の依賴する强力は以上二者と異り、心理學上の所謂示唆（サジエスション）の力である。彼等は他人に恐怖を與へずして、却て人に希望を與へ、之に乘じて其計畫を實現せんとするのである。

試に彼等が其計畫を遂行する順序方法を見るに、先づ彼等は熱心に其企業の成功を信じ、直に富裕なる有力者となりたるかの如く感じ、それより想像に想像を重ね、漸次腦裡に巨大なる事業の幻影を描きて、殆ど病的狀態に達する。彼等は更に他人をも自己と同樣の氣分を生ぜしめ、其計劃を實現すべく助力させようとする。投機的企業者の上乘なるものに在りては恰も詩人の如き天才を具へ、自己が驚異すべき大業を成功し得ること、自己と事業に協同する者は非常の幸福を享くべきことなどを世人に傳へて黃金世界が今にも實現するかの如くに聽者の心を魅し去る。彼等は盛んに他人の想像力を煽り立て、信仰を喚起せしめ、且つ其賭博的性情を唆つて、之を自家の用に利用する。斯くして遂に種々の大規模の投機事業發生し、一切の企業殆ど皆賭博を以て其成立の骨子とするやうになる。實業界を通じて燃えつゝある焰は實に賭博である。ザッカードは此事實を次の如く道破してゐる。

然り、實に然り。投機がなくては實業もなく特別の利益もなく、思もひよら

ぬ幸福もなく、天界の我眼前に開くこともない。自己の勞役に對してそれ相當の普通の報酬を得よといふが如きは止めよ。それだけの收入ならば、人生は無味乾燥なもので、人間の機能や材力は衰へて遂には消磨して仕舞ふ。寧ろ今一錢を投げて後に教育費を得べしと信ぜしめよ。無一物の貧者も一朝にして數百萬金を懷にし得べしと語れ。茲に怖しき大競爭起り、人間は絶大の精力を發揮し、其結果として偉大なる活動を生ずる。

以上を一言にして蔽へば、單に世人の慾情を煽り立てよといふので、目的さへ達するを得ば、如何なる手段を取るも構はぬといふのである。斯くて多數人が熱狂して騷ぎ立て、投機師の企業を完成すべき資金を出せば、其時は彼は既に成功の途に就いたのである。計畫が大なれば大なるだけ、其全部を了解することは一層困難であるが、其困難なるだけ又それだけ投機師の目的に副ふ譯であつて、彼は之に乘じて如何にも異常な事が成立つやうに吹聽する。されば銀行業でも、海外貿易でも、運輸交通でも、其企業の規模の大なるに從つて、投機的精神を旺盛ならしむるに適當してゐる。斯く言は

ば人は直ちにパナマ運河のことが胸に浮ぶであらう)。投機的企業は最初から其通りで今日でも亦斯樣な風である。

五　商人

商人が單純に金錢を取扱つたり、又は物品を買いだりすることから、進んで眞の資本家企業を營むやうになれば、始めて是も一の企業者と認むべきである。最初は商人と言つても、實は手工の如き風を帶びてゐたのであるが、それが少しづゝ擴張されて、知らず識らずの間に純粹の商人と變遷して仕舞つた。而して以前には物品の性質が主眼であつたが、後には其數量を第一とするやうになつた。又純粹の商人となつてからも當初は仲買人に過ぎなかつが、遂にそれが資本家企業を營むやうになつたのである。

商人の變遷を知らんとするには歴史上最もよく商業的精神を發揮したフロレンス人、蘇格蘭人及び猶太人に就て、彼等が行つた手段を研究する必要がある。

伊太利のフロレンス人は第十三世紀頃から地中海東海岸地方に於て商

業を營んでゐた。ヴェニス、ピサ及びゼノア等の商人は戰鬪を主としたが、フロレンス人は商賣專門であつた。ヴェニス人等が大なる海陸の兵力を有してゐたに拘らず、フロレンス人は其商業が極盛に達した時ですら一の海軍をも有せず、又是ぞと言ふべき自國の船舶もなかつた。即ち其貨物は外國船を雇うて輸送し、若し保護の必要があれば、プロヴァンスやゼノアの武裝船隊を雇入れ、且つ成るべく掠奪を免れんが爲めに安全な航路を取つた。彼等が外國で成功した原因は金力と條約と商業其他一般の專門的知識との三者である。彼等は他の好戰人民の戰陣の後へに附いて往つた。而して其好戰人民が疲弊すると、其跡へヌク〳〵と坐り込む。若し又好戰人民が亂暴を働いて、東邦諸國の國王や君主の意を害した時は、彼等は巧言を以て對手の利益を豫約し、或は贈物を與へなどして其信用を取込んだ。されば ヴェニスが獨力土耳古と對抗して、息も絶々になるまで戰ふことは、フロレンスの窃に望む所であつた。一四六三年の戰爭に際しても、彼等は巧妙な手段を弄して成るべくそれを西歐全體の戰爭たらしめぬやうに計つた。法

王バイアス二世が、フロレンス人に向つて、其戰爭に參加せんことを勸誘した時、彼等は自國の商人や船舶を土耳古より召還する時間がないといふ口實を以て之に應じなかつた。其間に彼等は土耳古王の歡心を買ひ、其會議にも列し、又其勝利をも共に祝ひ、商人として出來る限りの利益を貪つたから、ペラに居たゼノア人や、地中海東岸の伊太利人等は、擧つてフロレンス人を嫉み且つ憤つた。ヴェニスより共に手を携へて、土耳古と開戰せんことを申込んだのに對して、フロレンスは既に土耳古へ輸出する爲めに多量の呉服地も製造し、又其他にも種々の物品を仕入れた後であるから、折角の勸誘ながら時機が遲いと答へたのも、一向不思議な話ではない。斯かる政策は國人の品位を傷くる場合が多かつたが、商業上の利益さへ得らるれば國家の威嚴なぞは顧るべきではないとした。さればサイプラス島では、フロレンス人は特權を有する人民の列に加へられなかつた。然るに特權がなければ關稅二分減の恩典に浴することが出來なかつたから、フロレンス人は僞つてピサ人と稱したもので、それが露見して後に、ピザ人から非常な侮辱

を與へられた。但彼等は苟も利益の得らるゝ以上、侮辱を受くるが如きは平氣であつた。

工業に於てもフロレンスの織物製造は資本的に組織されてゐた。それは恐らく世界に於ける嚆矢であつたと思はれる。實にフロレンスの公生活には、一として商業精神の反映せざるはない。彼等は其傑人の艱難を顧みず、又其美術家をば冷遇した。第十四世紀以來フロレンスが、銀行業者や呉服商に支配されてゐたのを見れば、是は當然の次第で、遂に金融業者の一族が國王同樣の地位に至つては、彼等の商業精神を最も十分に發揮したものと言へよう。

蘇格蘭人はフロレンス人に比すれば、多少型が違つてゐるが、然し大體に於ては類似してゐる。フロレンスで銀行家の一族たるメヂチ家が王位に上つたのは、歷史上唯一の例とされてゐるが、蘇格蘭人が金錢に換へて、其國王チャーレスを賣つたのも、古今無比の事實である。勿論茲にいふ蘇格蘭人とは、其低地々方人のことで、高地々方人と低地々方人との間には其性格に

南北兩極ほどの差異がある。

低地蘇格蘭の東西兩岸は海波に洗はれてゐるに拘らず、其國人はフロレンス人と同樣に航海生活を喜ばぬ。彼等は決して大規模の海國人種とは言へぬ。第十七世紀の中葉、英國東印度商會は、約一萬五千噸の船舶を有してゐた。一六二八年にテームス河口を航行したのは印度船七隻四千二百噸と其他の船舶三十四隻七千八百五十噸であつたが、之に比して蘇格蘭最大の港レースは、十二隻千噸の船舶があつたのみで、グラスゴウは十二隻八百三十噸、ダンヂーは十隻四百九十八噸に過ぎない。第十八世紀以後に入つても蘇格蘭には船舶の數殆ど見るべきものなく、彼等の貨物は以前より概ね英蘭の船舶で輸送されたのである。

蘇格蘭人の主要商業は內國的であつて、彼等は高地々方人と倫敦との仲買をした。其海外冒險と言つては、魚類、石炭、羅紗地等を愛蘭、和蘭、諾威及び佛蘭西等に携へ行き、『ホップ』、穀類、麥粉、牛酪等を持歸る位のことであつた。然し彼等は商賣で利益を得んと欲する念燃ゆるが如く、第十六、七兩世紀中

は頑迷なる宗教爭鬪に從つたが、第十七世紀の末頃より、彼等の儲積してゐた觀念は爆發して、遂に蘇格蘭人は內外に於ける成功した企業者となつた。彼等は『塵積つて山となる』といふ語を其企業の精神としてゐた。

蘇格蘭人の商業的活動を支配するものは、要するに商業精神である。蘇格蘭文明史の著者マッキントッシュは、第十九世紀の初めに於ける蘇格蘭人と愛蘭人との商業に關する態度を比較して、次の如く言つてゐる。

一擧に突擊して、富が得らるとならば、愛蘭人は非常なる勢で開始するに相違ない。然し簿記を捻くり、憐れな帳面を前に控へて、生涯腰を屈めて商賣に從ふなどといふことは、彼等の到底實行し得ぬ所である。所が蘇格蘭人にはそれが出來る。蘇格蘭人は或は一時の情熱に驅られて、俄元氣を出すことはないかも知れぬが、有終の美を濟す沈着力を持つてゐる。愛蘭人は栗鼠の知くに跳ね廻り、蘇格蘭人は枝から枝へとポツ〳〵匐ひ上つて滿足する。蘇格蘭人には此賞讃すべき氣性があり、上長に服從する非常な力があり、加ふるに順風一度吹來れば、直ちに其帆を張る勇氣がある。倫敦の商

家には必ず蘇格蘭人の番頭が居るのみでなく、數多の事業に蘇格蘭人が關係してゐるのは、全く右の特質の結果である。

蘇格蘭人に換ふるにフロレンス人を以てせよ、矢張り右の通りである。更に換ふるに猶太人を以てせよ、又同じく然りである。猶太人に就ては別に余の『猶太人及び近世資本主義』といふ一書があるから、此處には其詳說を避けるが、羅馬帝國時代に於ても、猶太人は驚くべき商才を有し、利を趁うて東西半球を跋涉した。彼等の商賣に熱心なるや、羅馬帝國内到らぬ隈なく、戰爭あれば戰爭より、殺戮すれば殺戮より、暗殺あれば暗殺より常に其利益を得んとして、眼を見張つてゐた。即ち他の人種は戰爭、殺戮又は暗殺の方法に依て利益を得んとするが、猶太人は戰爭、殺戮又は暗殺を俟つて陸軍もなくして、地球上に偉大なる地位を造り上げた。其用ひた武器はフロレンス人と同じく、金力と契約と知識とである。彼等の建てた企業は商業精神に胚胎し、而して資本家企業家となつた猶太人は、皆商人の氣質を備へたものである。

六　製造人

茲に製造人と言ふは、自身其手を働かして、仕事に從ひ、結局資本家企業をなす者のことである。彼等は企業者としては、商人と甚だ似通つた點が多い。彼等は投機師とは非常な相違があつて、其强力に訴ふることを厭ひ、又封建の權利を用うることをば忌む點に於て前に擧げた第一、二、三の型の企業者とは大なる差がある。製造人が企業家となるまでには、平和手段に依て其業を進め、或は辯舌を以て、或は熟練なる取引を以て、原料の供給者や雇人や、顧客等に對したもので、又是れ一の取引商人である。然し彼等は是のみではいかぬ。彼等は打算に長じ、貯蓄をしなければならぬ。故に彼に在つては他の企業者に先んじた一の新精神を要する。然らば此新精神とは如何なる性質のものか。それは次の數章に於て述べることとする。

（第二）中等階級の思想

第七章　中等階級の道德

今日の所謂資本家の精神中には、企業の精神並に利慾の念の外に、幾多の資性を含蓄してゐる。余は之を總括して中等階級の道德と言ふ。是は尊敬すべき市民、一家の酋長並に正直なる商人たるものゝ見地、確信及び此見地確信に基く彼等の行爲、動作等一切を含むので、完全なる資本家企業者は、必ずや尊敬すべき市民であらねばならぬ。然らば此尊敬すべき市民とはそも如何なる風采の人物で、又其始めて出現したのは如何なる地方であつたか。

余の知る限りでは此尊敬すべき市民は、第十四世紀の末葉に、始めてフロレンスに現れた。市民とは言ふものゝ、そは必ずしも都市に住居するもの、又は商工業者のみを指すのではなく、這間に發達せる一種の氣質を具備した階級の意にして、之を呼ぶに『ブルジョワ』即ち中流人士を以てするのが最も適してゐる。但し茲に中流と云ふのは、社會階級の意味ではなくて、單に斯かる一種の形式の人士を指すのである。

余がフロレンスを以て『ブルジョア』の搖籃地とする理由は外ではない、同地には第十五世紀頃から、斯種の人士が多く見られた證據があるからである。アルベルチは、當時に於ける『ブルジョア』即ち中流人士の典型で、彼等の見識の如何を知るには、彼の著書を以て最好の材料とする。彼は『一家の政治に就て』といふ書を著したが、後世ダニエル・デフォーやベンジャミン・フランクリンの著書と同樣に一の古典として廣く愛讀され、其言は常に家庭に引用された。されば、アルベルチの意見は、當時の多數人民の懷抱せるものと見るべく、時人の見地は略それで明白にされることゝ思ふ。今其大要を擧ぐれば、自から分れて次の二部となる。一は實業内部の組織に關するもの、他は店主と顧客と及び店主と外界との關係に關するもので、前者を『聖（たふと）き經濟』と呼び、後者を『實業道德』と唱へる。

一　聖き經濟

アルベルチは節約を以て『聖き』ものと言ひ、賢良なる經濟には、或根本的事柄を必要とすると述べてゐる。

第一に必要なものは思慮である。善良なる支配人は、常に自分の爲すべきことを綿密に考へる。收支に十分の注意を加へ、一身を仕事に委ねて、之を卑賤のことと思はず、又決して恥とせず、寧ろ誇とする。此風漸く一般世人に認識せられ、富貴の人と雖、之を學ぶやうになつて來た。行商人や小商人が一文の錢をも忽諸にせず收支の勘定を合せるに熱心なのは當然の話である。此時代から富者も貴人も、舊時の封建君主ほどの富を有する者までも、收入と支出との均衡に注意し始めた。斯かる事は是迄になかつた現象である。

昔の格言は今や全く放棄せられ、玆に新しい見識が採用さるることになつた。封建時代の經濟は、支出を標準とし、封建君主は先づ自己の生活に必要なだけ、即ち自分が遣ふだけのものを定め、それに應じて收入の途を講じ

たのであるが、今や一切の經濟的活動は、收入を以て第一の要素とするに至つた。『汝の支出を汝の收入に超過せざるやう、深く心せよ』是れアルベルチの訓戒であつた。此語は實に總ての成功する家事經濟の始めで又終りである。即ち善良なる中流人士の信仰個條、新時代の金言、尊敬すべき人士の俗界哲學の眞髄である。

中流階級の資本的經濟活動は、擧つて此基礎の上に立つてゐる。從つて其第一の根本的必要は節約である。而して此節約は、他より强制さるべきものではなく、自ら進んでなすべきものである。貧人は苦しさ餘つて無理無體に節約する。然るに富者も亦節約を旨とするに至つたのは、正しく未曾有の事柄である。自分の利得よりも、餘分に消費すべからずと言ふのが初めの論であつたが、やがて之が進んで、自分の利得よりは、少ししか實際消費せぬと言ふことになり、貯蓄の思想が玆に現出した。此貯蓄も必要上已むを得ぬと言ふのではなくして、之を一の道德と看做すやうになつた。即ち中等階級に在つては、假令富者と雖、經濟的生活を以て其理想とするに至

つた。富豪も田舍漢も、齊しく『一錢を貯ふるは、百金を散ずるより尊むべし』と言ふを以て格言とした。封建時代の殿樣然たる生活は、最早世人の理想でなく、善き秩序ある經濟を旨とし、節約を愛し、之を以て經濟活動の一德とまで尊敬するやうになつた。アルベルチの語を見れば、如何に節約を尊んだかゞ分明である。

彼は、富を致すには、多く得るのみでなく、少く消費しなければならぬ、浪費驕奢は、貧の基なりと告げてゐる。彼は曰く、『不要の支出は大敵と思へ』『己む得ざるにあらざれば一錢にても多く消費する勿れ、そは狂氣の沙汰なり』『浪費は曲事なり、節約は善事なり、有用にして賞讃すべし』『節約は何人をも害せず而も一家に有用なり』『節約は聖し』『我の最も快しと思ふ人を知るや、そは必要以上に金錢を支出することなく、剩餘は悉く之を貯ふる人なり、節約以て成功する支配人とは正に斯種の人を指す』『誰をか善良なる支配人となす、中庸を保ち得る人是れなり、然らば中庸とは何ぞや、答ふるに難からず、支出は絶對に必要なるものを超過せざること、相應の生活に必要な

ものより以下に落ちざること之なり』と是れ。

アルベルチは、各種の經費を分類するに當つて、必要な衣食の入費は別として、他は分ちて三とした。第一は望ましきもので、是がなければ自己の信用又は家門の名譽を傷くるもの、卽ち邸宅、別莊、倉庫等である。第二は是非必要と言ふ程ではないが、左りとて別に咎むべきものではなく、之に費せば心愉快にして、費さゞればとて別に害なきもの、卽ち厩舍、書籍、壁畫等である。第三は、狂氣の沙汰にて、咎むべき經費である。例へば、奴僕を有するが如きは、野獸にも劣るものを養ふと同樣である(アルベルチが如何に封建臭味を憎惡したかを見よ)。

さて又同じく支出するにしても必要なものは直に出すのがよいが、不必要なものはなるべく延ばすに限る。『それはどう言ふ譯でありますか、先生は何事も深く考へてなさいますが、どうか其理由を敎へて戴きたいものです』と、ギアノツォの弟子が師に尋ねた時、彼は、『外でもない、延ばしてゐるうちには欲しくなくなるかも知れない、さすれば此金を貯蓄することが出來

るからである。若しまだ欲しいとしても、最も安價で買ふ方法が見つかるからである』と答へた。

實業(及び生活)上完全な經濟をなすには、(之を物質的經濟と名くべき)節約を要するのみでなく、其行爲も之に相應せしめ、又時間も有效に用ひねばならぬ(是は精神的經濟と云ふべきものである)。是れ當時頻りに敎へられた所である。卽ち心と體と、就中、時間を大に注意して用ゐねばならぬ。『余は、生涯、努めて有用にして名譽ある事柄をした』といふだけでは足ちぬ。『余は出來得る限り道理に適つた方法で、體と心と時間とを用ひて、其何れをも出來得る限り節約し、出來得る限り損耗を少からしめようと努めた』といふのでなければならぬ。されば怠惰を避けねばならない、怠惰と奢侈とは二大敵である。怠惰は心身二つながら腐敗させて、不名譽と恥辱を生む。開闢以來、罪惡の源泉となつたものは怠惰の心である。公私の生活に有害有毒なるもの、蓋し怠惰なる市民に若くものはない。怠惰はやがて奢侈となり、奢侈はやがて破法に導く。

ギアノッオの弟子等は、そが悉く師の敎訓に從ひ難い事を述べたに對して彼は更に、そを醫するは困難でない、唯時間を節約せよと敎へた。『時間を浪費しなければ、百事殆ど成らざるはない。時間を有用に用ふる材能あるものは、易々として如何なる事情にも打克つ』。斯くてギアノッオは時間を最も善用する方法を次の如く說いた。

貴重なる時間を一分一秒たりとも浪費すべからずといふ規則を作つて余は決して惰けないやうにしてゐる。睡眠さへ貪らない、唯疲勞堪へ難き時にのみ我身を横へ、一生懸命になつて睡眠と怠惰から逃れようとし、絕えず何か仕事をすることにしてゐる。自分の目的を成就する爲めには、每朝其日の時間表を作る、卽ち自分の爲すべき義務をば書き立てゝ、朝にすべきこと、午後にすべきこと、夜分にすべきこと、一々一定の時を割付ける。從つて仕事もドシ〳〵捗つて、殆ど努力を要しない、そして夜寢る前に其日にしたことを考へてみる、余は時間を失ふ位なら、睡眠を失つた方が遙によい。

此調子の說敎は幾度となく繰返されてゐる。然し實業家の記憶すべき

は、努力勤勉は富源なりと言ふことである。『利益は仕事の擴張と共に增す、仕事が擴張すれば、努力と勤勉も亦增すからである』。

更に美術家レオナルド・ダ・ヴィンチの祖父の言を引いて、第十五世紀のフロレンスの中等階級市民の精神を描かう。レオナルドの祖父アントニオは小供等に向つて、『高位も、光榮も、名譽も、國家又は軍隊の地位も、大なる富貴も、大なる學問も、決して望むな、最も確かな生活法は、身分相應の方法を取るにある』と敎へた。

老人は猶も靜かな强い調子で、中庸の金言を話した。『今日から既に明日の必要に備ふる蟻は、お前達の模範である。節約せよ、中庸を取れ、蜘蛛は網を廣く張つて甚中央にゐるが、何者にても之に觸るれば、網を强くし、何時でも修繕するように寸分も油斷しない。繁昌する家族と善い家長とは卽ち此蛛蜘である』と。老人は、又每夕、晩鐘の響と共に、家人を擧つて一室に會せしめ、夜は自ら邸宅の周圍を巡り、門戸を鎖し、鍵は寢室に携へて、枕の下に置いた。些細な家事も見落したものはない。家畜に與ふる糧秣の過不足か

ら、下婢が洋燈の心を高くして油を浪費することまで知つてゐた。何處一つ注意しない所はなかつたが、さりとて卑吝なのではなかつた。着てゐたのは最良の衣服であつて、彼等にも然せよと敎へた。高き價を聞いても彼は毫も驚かなかつた。衣服の材料が上等であれば、結局、最も經濟になると言ふのであつた。

老人の考へに依れば、家族は一つ屋根の下に一緒に住むべきである。何故かと言ふに、『一同で食事すれば、一つの卓子、一枚の卓子掛、一箇の燈火で十分である。若し之が二組に分れると卓子掛も二つ、燈火も二つなければならぬ。又家族一團となつて居れば、一つの暖爐で善いが、若し二組となれば二つの暖爐が必要となる。百事皆此通りである』。

彼は婦人に對しては、聊か淺薄であつたやうである。曰く『女の爲すべき事は、料理と小供の事で、決して夫の仕事に口を出すべきではない、女の智慮に賴るものは愚物である』と。

此賢明なる老人も時としては横着なことも語つた。『聖き寺院の定むる

如くに慈善を施せ。されど不運なものよりも、幸運なものと交り、貧人よりも富者を友とせよ。最高の處世術は慈善らしく裝ひ、狡猾に打勝つには狡猾を以てするにあるなり』と。

老人には多少狡猾なやうな傾向があつた。彼は其兒等に、園の最端に、果樹を植ゑよと命じたが、そは樹影が隣人の田圃に落ちんが爲めである。借金の申込は口實を設けて丁寧に謝絶せよと敎へ、さて言ふには、『さすれば二重の利益がある。――其金を失はず、且つ欺かんと計りし者を嘲り得るのである。若し右の援助を求めた人が敎育ある者ならば、丁寧に否と答へれば、彌徳とする。下劣なる者よりは金を取るべきも之に、金を與ふるは愚人である。さりながら親戚又は家族の者を助くることなれば、取るべき手段は明かである。獨り金錢のみならず、大事な生命も、事業も、名譽も、其用に供せよ。家族の爲めには其一切を犧牲にすべきものぞ。他人を助くるよりも血族を助くるは、遙に尊むべく又利益あることである』と。

茲に數百年間に亙りて、發達せる中等階級の道德の跡を辿らんには、內外

兩面から究めねばならぬ。卽ち是等の道德の總和が如何に膨脹したか、而して大多數の人民は如何に之を受入れたかを知らねばならぬ。第一は種種な書物が材料として殘つてゐるから面倒でないが、後者は當時の事情からして演繹して見るより外に仕方はない。

中等階級の道德の精神は第十四世紀頃伊太利の著述家が書いた時代より、實際更に發達しなかつた。アルベルチが弟子等に授けた敎へ以外に、後代の商人は何等異つた敎へを受けてゐない。レオナルド・ダ・ヴィンチの祖父の生活と、ベンジャミン・フランクリンの生活とを比較するに、毫も異らない。根本の主義は同一であつて、後世に成つた文章の言語まで亦殆ど同一である。第十六、七、八の三世紀に於る此種の標準書籍は、アルベルチの著書を飜譯した觀がある。一二の例を擧ぐれば直ぐ明白になる。

第十六世紀の主なる出版は農業に關する書籍で、何國にも隨分澤山ある。西班牙の著者エレラは商業を嫌つたが、農民に說いた道德は、アルベルチが敎へたのと歸を一にしてゐる。卽ち農民は用意周到に標準を樹てゝ行動

し、惡魔の如くに怠惰を避け、仕事には餘す所なく通曉すべしと言ふ。

佛人エチアヌは何と敎へたか。曰く『善良なる農民は、餘暇あれば自分の仕事のことを熟考し、狩獵や宴會や友人の接待等の爲めに、仕事を等閑にすべからず』と。就中『農民は時間割を定めて、分時も浪費してはならぬ、支出は決して收入を超過してはならない。勤勉すれば極めて痩せた土地からでも收獲は得られる、加之熟練なる農民は、特に利益を第一として仕事を進め、一時の欲望や當座の必要を滿足せしめぬやうにせねばならぬ』と言ふ。

伊太利人タナラは特に『効用』を力說した。『收益のない花卉は植ゑる勿れ、金になるものゝみを栽培せよ』と農民に敎へた。『エデンの花園でアダムを罪に陷らしめたものは、美しく見へる果實であつたが、吾々萬人に取つても同樣である。富は朝廷に仕へ、軍隊に勤め、又は鍊金術の如きで得られるものではない。致富の祕術は唯一のみ、曰く、節約なれ』と。

第十七世紀中『商人の爲めの書物』や『商業辭書』などが澤山出た。中には實業家は老若の別なく、道理と道德とに準據して、其生活と實務とを遂行すべ

しと勸めてある。曰く『何事も熟考せよ、周到の用意を以て百事を整へよ、眞面目なれ、勤勉なれ、節約なれ、然らば地上に於ける善き物は汝の有に歸すべく、汝は身分ある市民たるべく、富貴の人たるべし』と。相變らず同じ主義を說いたものではないか。

此等の書籍中にて最も人に知られてゐるものは、サヴァリー著『完全なる商人』と題する書物である。主として商業術を說いたものではあるが、又道德に就ても書いてゐる。彼の言に依れば、商人の成功は五事に由る。卽ち完全なる智識、秩序ある整理、勤勉、節約及び商業道德である。

ダニエル・デフォーの『完全なる英國商人』中には、商業道德のことが隨分書いてある。第五章は『商業上の勤勉努力』として、殊に之を力說してゐる。『如何に完全なる商賣上の知識を備へ、如何に店の位置良好でも、努力せねば何の役にも立たぬ』。商人たるものは娛樂、遊戲の類は、例令無害のものと雖避けねばならぬ。然らざれば之が失敗の原因となる。同書第四版第九章には、『所謂無害なる娛樂が商人、特に靑年商人に有害なる事』とある。然しデ

フォーが最も排斥したのは狩獵と貴族風の娯樂とであつた。曰く『青年商人が、馬を飼ひ獵に出掛け、獵犬を慣らし、一角の狩獵家になり澄してゐるのを見て、卜筮師ならねど前途の運命を憂慮せざるを得ぬ』と。又贅澤な生活は、『徐々に進む一種の熱病の如きもので、生活力を吸ひ盡す隱れたる敵である、商人の生命と血液とを吸ひ取つて仕舞う』。賢明なる商人の避くべきは『(一)贅澤な生活卽ち驕奢を爲すこと、(二)贅澤な衣服卽ち綺羅を飾ること、(三)贅澤な友人卽ち自分より以上のものと交ること、(四)贅澤なる外出卽ち華美を粧ふこと』である。商人たるものは、『商業は假裝して遊ぶ舞踏會ではない、正直な生活の繪畫であつて、用心と儉約とにて維持さるゝこと』を心に銘ずべきである。『店務に心を用ふること周到にして、儉約を旨として生活すれば、如何なる身代もどれだけにでも增すことが出來る』且つ『支出が常に收入より少なければ、必ず身代が大きくなる、さもなければ如何に成行くか、茲に云ふに及ばぬ』。

サヴァリーやデフォーの書物は、多くの版を重ね、第十八世紀に入つても猶世

に流布した。後世彼等の說を繼承したのはベンヂャミン、フランクリン等であつたが、デフォーは實にフランクリンが愛讀書の一つであつた。

中等階級の人生觀は、米國のフランクリンに至つて絕頂に達した。彼の嚴肅緻密なるは人をして驚倒せしむる概がある。百事百般規律詰めで、一定の軌範に則り、一擧一動皆經濟から割出した。彼は經濟の崇拜家であつた。或時社交の會合に出席すると新しき洋燈があつて、人皆之を激賞してゐたが中に一人の客があつて、此洋燈は舊いものより高價でないか知らぬが、部屋を明るくするには、出來るだけ金のかゝらぬものが善いと言つた。フランクリンは此事を叙して後曰く『余は斯く經濟を重ずる一般傾向を見て甚だ喜んだ、經濟は、特に余の愛する所である』と。彼の哲理と彼の面目とは此處にある。

彼が時間を尊重したことは世人の熟知する所であつて、『時間は金錢なり』の語は、實に彼の作つた格言である。彼曰く『汝眞に人生を愛するか、然らば時を空費する勿れ、蓋し人生を作る所のものは時なればなり。吾等は必

要以上に、如何に多くの時を睡眠に費すことぞ、そは眠れる狐は鷄を捉へず、又墓に入りて後は如何程にても十分眠らるべきを忘れしなり、凡百の事物中、時を以て最も貴重なるものとせば、之を徒費するは最大の驕奢なり』と。

時間の經濟に比すべきは、獨り金錢の儉約である。『若し富を得んと欲せば、得ることと貯ふることとを考へねばならぬ。西班牙は印度諸島から富を致さ無かつた、出る方が入る方より大きかつたからである。除くべきは贅澤な眞似ではないか』。

汝の能ふ所を得よ、得れば握りて放す勿れ、

之ぞ鉛を擧げて黄金に化するの奇蹟なる。

致富の道は、市場に通ずる道の如く至極平明である、それは主として、勤勉と節約との二語に由る。卽ち時間と金錢とを徒費することなく、兩者を善用するのである。勤勉と節約とがなければ、何一つ出來るものでない。此二つさへあれば何でも出來る。正直に得られる限りを得、得たる所を悉く之を貯ふるものは(無論必要の經費は除いて)、必ずや富者となるであらう。

フランクリンは生涯『聖き經濟』を崇拜した。其言行錄を見るに、彼は最善の道德を列記し、之に準據して、有德の人たらんが爲めに、如何に自修せるかを述べてゐる。中等階級卽ち『ブルジョア』の人生觀は、彼の規律ある生活に依て最後の表示を得たのである。彼の自叙傳の一節は尠からざる敎訓を與へる。

當時余は完全なる道德を造らんが爲めに、大膽熱心なる計畫を思ひ付いた。余は如何なる時にも過失なく生活したいと思つた。余は天賦の性癖、習慣又は交友等よりして、自分の陷る弊に打克たんと考へた。……完全な有德の士となるのは、吾々の利益であると、確信しただけでは、まだ踏外さないとも限らぬ。吾々の行爲が不變一定の正しいものになつて、それに賴り得るやうになるには、反對の習慣は破られねばならず、善良なる習慣は之を養成確立せねばならぬと思ひ定めた。そこで此目的を果す爲めに次の方法を按出した。余は項目十三の中に、當時自分が必要であり又は望ましいと考へた道德を悉く收め、それに一々短い訓言を加へて、考へてゐる所を十分に言ひ

表した。其道德の名と訓戒とは次の如くである、

一節慾　懶くなるまで食ふ勿れ、興奮するまで飲む勿れ。

二沈默　他人又は自己を利することより外は語る勿れ、冗談を避くべし。

三秩序　所有品は一定の場所に置くべし、仕事は、各々一定の時刻になすべし。

四決心　爲さゞるべからざることを爲さむと決心すべし。決心したることは遂行して懈怠すること勿れ。

五儉約　他人又は自己に有用なるものの外には、一切の經費を省け、卽ち何物をも徒費する勿れ。

六勤勉　時間を失ふ勿れ、常に何等かの有用なることを爲すべし、無用の動作は一切之を省くべし。

七眞摯　有害なる欺瞞を用ふる勿れ、無心に且つ正しく考へ、これに應じて語れ。

八正義　有害なることを爲して人を害ふ勿れ。義務を盡して他を益することを廢する勿れ。

九中庸　極端を避けよ、若し之を受くべきを思はゞ、害を蒙るとも憤ることを勿れ。

一〇清潔　身體、衣服、住居は不潔ならしむべからず。

二靜蕭　鎖事、凡事、又は避く可らざる偶發事の爲めに騷ぐ勿れ。

三制慾　房事は健康の爲め、子孫の爲めに稀に行へ、決して懶きに至る勿れ、或は自他の平和若くは名譽を傷くるに至る勿れ。

三謙遜　基督とソクラテスを學べ。

フランクリンは是等の道德を一々修得せんとした。彼は『ピタゴラスが黃金詩中にある勸告に從ひ、日々の試練こそ必要であると考へて、右の試練をばなさんが爲め次の方法を按じた。』とて、日々の道德表を作り、瑕瑾無きを期したのであつた。此北米共和國の祖先とレオナルド・ダ・ヴンチの祖父の思想との酷似せるを見よ。彼等の間には四百年の間隔があるにも拘らず、異る點に至つては極めて少い。彼等は同じく『ブルジョア』である。中流人士である。

然し此場合、重要な問題は、世人の多數が、是等賢者の立てた高尚なる標準を履行し得たか否やと言ふ點にある。商人は其行狀、果して克く、フランクリンの道德軌範に準じたか。賢哲自身の不滿なる點より見れば、彼等は恰も荒野に叫べる豫言者の如く見える。サヴァリーやデフォーは時代の惡しきこと、特に贅澤と奢侈とを攻擊してゐるが、實は一見した程惡くはなかつたのであらう。此勤勉、節約、中庸の精神、卽ち善良なる中流人士の道德の精神が遂に近代の資本家企業者、殊に前章に述べた第四、五、六の型の商人や製造人の間に扶植されたのではないかと思はれる。此精神の度合は國に依て違ふであらう。恐らく第十七、八兩世紀の佛人は、和蘭人や米人よりも感化を受けたことは少かつたであらう。事實確な證據もある。然し大體から言へば『ブルジョア』の精神は流布して、資本家精神の組成分子たらんとするに至つた。若し左樣でなかつたとすれば、最初の資本主義の代表者が『ブルジョア』の聲を放つたのは、抑〻如何なる譯であるか。彼等が斯かる聲を發したのは、唯其物の性質上、當然左樣になつたのではないか。中流階級の道德を

書いた本が、當時最も廣く讀まれてゐたのを見れば、世人の大多數は、中等階級の精神を心得てゐた筈である。『節約、勤勉、中庸』此格言は幾多の工場や店頭に金文字で書いて揭げてあつた筈である。こは別に驚くには當らぬ、アルベルチーの書は古典であり、デフォーの本は兩大陸で讀まれ、フランクリンの教訓は世界で最も廣く讀まれたのではないか。彼が勤儉を說きたる『致富の道』なる小册子は、歐洲大陸の新聞に轉載され、遍く世界中に散布されたが『英國では七十版、佛國では五十六版、獨逸では十一版、伊太利では九版を重ね、西班牙、丁抹、瑞典、威亞斯、波蘭、ガリシヤ、露國、ボヘミア、和蘭、カタロニア、支那、近世希臘等の諸語に飜譯されて、少くも四百版を重ね、今も猶好評を博してゐる。』此一事を以て見ても如何に著者の感化の大なるかを立證するではないか。

二　實業道德

商人として成功せんには、常に營業の內部をば、最も經濟的に整頓するのみならず、世間に對しても適當の關係を保つことが肝要である。此關係の

性質を支配する規律や掟をば、余は名づけて實業道德と言ふ。茲に所謂實業道德とは二つの意味で用ふる積である。一は營業上の道德で、二は實業家としての道德である。卽ち營業に於ける道德と營業の爲めの道德とも言ひ得る。

第一の意味に於ては、契約をするとか、顧客に對する關係とか言ふやうな事柄で、或は之を商業上の正直とも稱へる。信用を得ること、顧客を丁重にすること、約束は固く守ること、支拂は確實にすること等を指す。資本家企業家が進歩するに連れて、斯種の道德は彌益必要になり、是等全部を擧つて中等階級の道德に包含するに至つた。茲に所謂『正直』とは、農夫や大工に適用せんにも、聊か適用に苦しむ。それは身分關係が止んで、契約關係が之に代り、經濟上の關係が舊時の人身關係でない時代になつて、始めて用ひらるべき言語である。されば之を名づけて『契約上の道德』と言へば、其意一層明瞭になるであらう。

處で此實業道德も其初は一の個人的道德であつた。前に屢述べた中等

階級道德の祖先たるフロレンスの呉服商人等も、矢張此道德を修養したのである。アルベルチーの曰く、『我家族中には如何なる時にも、其言を破つたものはなかつた』。『吾等は單純に正直に約束を守つた、それ故吾等は大商人として、伊太利及び外國にも知られるやうになつた』。續いて彼の商人の指導者等も亦此主義を說いてゐるが、其口調は何れも殆ど等しい。

然し『商業上の正直』にも種々の度合があつて、國に依つて異つてゐる。概して言へば、資本主義の進歩に連れて、此道德は彌堅固になつた。後世になつてこそ英國人は、商業道德の模範として尊敬されてゐるが、第十七世紀頃の英國人は、此點では甚だ不信用なものであつて、寧ろ和蘭人の方が、遙に彼より優つてゐた。

第二の意味で言ふ實業道德、卽ち實業家の個人的道德も、亦資本主義の勃興と共に、中等階級の道德の一部分を成すことになつた。爾來、斯種の道德を修養するは、尠くともかゝる道德を備へてゐるやうに裝ふは、營業上から見ても便利となつた。これを總括したものが『中等階級の品行方正』である。

其處で實業家として成功する第一の戒は、自己の道德軌範に準應して生活すべしと言ふことになつた。その意如何と言ふに、一切の不行狀を愼み、身分ある社交界に出で、飲酒賭博、婦人を避け、說敎は缺かさず聽聞すべし、詮する所、常に品行方正なるべし、之皆營業の爲めなり、斯の如く道德の掟を守れば信用は確實なるべしと言ふのである。

アルベルチは此中等階級の行狀を『ヲネスタ』(正直)と呼んだが、これぞ彼の道德律の心髓であつて、他は皆これから分岐したものであり、價値ある所以も亦こゝにある。アルベルチの見解に依れば、『正直』は、公正な、實際的な賢明な仲介人の如くに、常に我々に附添ひ、我々の一擧一動、思想、欲望等、悉く之を權衡に掛けて價値を吟味する。我々の行狀に最後の上磨きを掛けるのは『正直』である。昔から『正直』は道德の最善の敎師、德義の眞伴侶、平和幸福なる生活の慈母であつた。加之吾等に取つて常に有用なもので、此德を修養すれば、吾等は富貴、名聞、人望、尊信が得られるのである

時代は推移しても、話は何時も同一である。伊太利の『オネスタ』は、佛蘭西

の『オンネーテ』英國の『オネスチー』となつた。此三つの意味は言ふ迄もなく品行方正と言ふことを引き括めてゐるのである。實業上から品行方正らしく見へれば十分と云ふのであれば、隨分聖人振つた風もあらう。然し、唯だそれだけではまだ〳〵不十分である。他人からしても品行方正であると認められねばならない。さればこそベンヂャミン・フランクリンは、『余は商人としての信用と品格を得んが爲めに、啻に事實勤勉節約であつたのみでなく、懶惰驕奢と見られぬやうにと努めた。余は質素なる衣服を纏ひ、怠惰なる遊戯の場所には一切出入せず、決して漁獵にも往かなかつた』と言つてゐる。

第八章　計算術

資本家經濟の大部分は金錢にて表示し得べき貨財又は勤勞に關する契約及び約束である。例へば生産方法を買收し、製品を販賣し、勞働者を傭ひ込む等の如き是である。資本家的經濟活動の目的は金額である。されば計算は資本家精神の肝腎の要素であつて、こは資本主義歴史の初期から認められてゐる所である。計算とは何ぞと言ふに、宇宙のことは總て之を數字上に考へ、是等の數字をば收支勘定に繰込む技能である。言ふまでもなく、數字は常に價値を意味する。即ち結果が得となるか損となるか、企業が利益を生むか損耗を告ぐるか、此損得、利害を示す所のものが計算である。

扨、計算は商業算術と簿記の兩者を機關とする。而して計算的慣習の起原と發達を研究するには、三箇の方法がある。一には計算に用ひる器具の發達した歴史を見る。二には殘存の帳簿、日記帳其他類似のものを見て、何時の時代には如何なる計算をなしたかを知る。最後には此事に關して其

時代に生活して居た人の意見に徵するのである。茲に中世紀以來の計算の慣習に就て其略史を述べよう。

商業算術の起原は伊太利、詳しく言へばフロレンスである。一二〇二年レオナルド・ピサノの算術書が出て、正確なる計算の基礎が据ゑられたが、こは唯基礎を据ゑたと言ふだけで、實際の計算術は其進歩甚だ遲々たるものであつた。アラビア數字が伊太利に行はるるに至つたのは、第十三世紀からである。此數字を用ひないで、正確迅速に計算することは、殆ど不可能である。然るに一二九九年に至るも、アラビア數字は『カリマラ』組合では、其使用が禁ぜられてゐたやうな次第で、伊太利で之を採用することは頗る遲緩なものであつて、第十四世紀の後半に出た教學書には、アラビア數字と羅馬數字とを用ひてゐた。

然るに伊太利では第十四世紀から、北方諸國では第十五、六兩世紀から、計算の技術が急速の進歩を遂げ、從來の面倒な割符勘定は、數字勘定の代る所となつた。言ふまでもなく、こは一の進歩であつて、コブルクの算術教師シ

モン・ヤコブは、『重荷を背負うた歩行者に比すれば、荷物を持たぬものは便利を有すると同じく、數字を用ふる計算者は、割符を使ふものより便利である』と言つた。

第十六世紀の數學家たるタルタグリアが、商業算術を完成したより餘程以前に、伊太利商人間には貨物を勘定するに『總數計算』なる雜誌が行はれてゐた。こは『外國式』と言はれたが、實際其始は佛蘭西と獨逸で、其處から第十六世紀の初に伊太利へ輸入されたものである。初めて獨逸に於て此法を說いたのはハインリヒ・グランマトイスで、其算術書は一五一八年に現れた。始て小數が發見されたのは第十五世紀中のことで、シモン・ステフインの力に依り、一五八五年以來段々に之が用ひられるやうになつた。而して算盤(算數器)が出來たのは一六一五年である。

算術に關する書籍の刊行彌盛となり、商業算術は次第に簡單になり、又第十四世紀以來特に商業都會で發達しつゝあつた算術學校は、算術の知識を廣く播布したのである。第十四世紀にはフロレンスには、六箇の算術學校があつて、千二百名の生徒を收容し、算盤と商業算術の初歩を教授してゐた。獨逸最初の算術學校はルウベック市で、漢堡では一四〇〇年頃に至つて其必要が認められた。

整頓した簿記の始は第十三世紀である、法王ニコラス三世の一二七九…八〇年度の日記帳及びフロレンス市の一三〇三年度支出簿を見れば、當時單式簿記が完成されてゐたことが證せられる。又複式簿記の始つたのも、さまで後のことではない。これが第十三世紀頃から用ひられてゐたか否かは疑しいが、コルネリヲ・デ・シモニスの調査に依れば、一三四〇年にはゼノア政府では、複式制度を用ひてゐた。而して其完全してゐる處を見ると、餘程以前から行れてゐたものらしい。第十五世紀に至れば公私共に、複式簿記を使用した證據は幾らもある。中で最も完全なのは一四〇六年ヴェニスのソランゾ兄弟商會の簿記であつて、理論上の研究としては、フラ・ルカ・パキウオリの算術論中に、複式制度が出てゐるが、理論の方では之が最初のものである。

されば資本主義が將に咲き出ようとする頃に當つて多少ともに正確な計算をしたものは伊太利人である。其頃には中等階級の企業者等は、定めし現今で言はゞ簿記掛も自分でしたことゝ思はれるが、彼等は商業算術や簿記を熟知してゐた。ベネデット・アルベルチ曰く『鋭敏な商人の手は、常にインキで汚れてゐるやうで無くてはならぬ。商人は多人數を對手にするもの故、何事でも帳面につけて、契約でも收支の事でも、一々之を記載し、屢〻之を檢めて見なければならぬ。要するに其手からペンを放さぬ位でなくてはならない』と。

上述の如く商業算術が流行したのは、第一が伊太利で、次の世紀には和蘭が魁をしてゐる。和蘭は中等階級道德の模範であつたのみならず、正確な計算に於ても模範であつた。第十八世紀になつても、此點に於ては和蘭と米國とは實に著しい相違があつたのである。ベンジャミン・フランクリンの書いたものを見るに、彼の仲間たる一米人が遠方に住つてゐたが、一向計算報告を送つて來ない。然るに其男が死んだ處が、未亡人は和蘭人であつた

が、取引一切の事を明瞭に通告して來たと言ふことである。フランクリンは、『余の聞知せる所では、和蘭に於ては計算に關する知識は、女子教育の一部になつてゐるとのことである。』と言うてゐるが、一七三〇年代には、確にさうであつたものと考へられる。

此點に於て和蘭に續いたものは英國で、第十九世紀の初には、獨逸の商人は、商業教育の進歩した邦國と言へば、英國と和蘭に指を屈したものである。無論其以下に程度の低い國でも、計算術は資本家精神を強めたに相違ない。

（第三）資本家精神の國民的表現

第九章　諸種の表現

資本家精神の勃興發達は、近代に於ける歐米各國民通有の現象である。こは上述せる所を見れば明かであるが、而も其進歩發達の傾向に於ては、各國必ずしも同一ではない。第一には國々に依て異り、次には時代に依て相異する。玆には先づ第一の、國々に依て異る點を述べねばならぬが、それには如何にして斯かる相異が生ずるに至つたか、其事から研究しよう。

一　各國民は時を同じうして、資本主義の潮流に囚はれたのではない。從つて中等階級が起つた當初から相異せるものと見なければならぬ。

二　一國民間に於ける資本家精神の勢力は、其持續期間に於て相異する。從つて資本主義の發達に要した時間に於ても相異を見るべきである。

三　資本家精神の強度は國に依て異る。從て企業精神の蔓延、利益の欲

望、中等階級道德の度合も亦異るべきである。

四　其範圍に於ても亦異る。卽ち各種の社會團體が、資本家精神に感化される度合に於ても異るのである。

五　資本家精神を組織する要素と要素との關係も、國々に依て異る。例へば一國は他國よりも、企業の精神に於て著しく進んでゐるよう、又或國は中等階級の精神を他國よりも澤山に有してゐよう。其他の要素に於ても亦斯くの如くであらう。

六　資本家精神の組成要素が發達する能力は、國々に依て異る。而してそが盛時に達する迄に要する歲月には、自から相異を生ぜざるを得ない。是等要素中の或ものは、同速度で發達しようが、然し其他の要素は速度が違ふであらう。

斯く各種の相異があるから、中等階級の見地が全體として發達するに當り、國々に依りて複雜な現象を生ずるのは逆覩し易い道理である。然し諸國民の進歩が相異する中に就ても、最も肝要な點は次の條件に依たもので

ある。其國が資本的に强かつたか、又は弱かつたか、資本主義の組織要素の全部が成熟期に達したか、又は其中の一部分ばかりが成熟したか、其發達が歴史上早かつたか晩かつたか、又それが一時的であつたか、間歇的であつたか或は永久的であつたか、是等に就ては大略次章で論じよう。

第十章　諸國に於ける發達

一　伊太利

資本家精神の初めて發現せるは伊太利であつて、第十三世紀以來ロムバルディーの商業諸國に擴がり、第十四世紀に至つて益發達し、中世紀中、歐洲諸國は其後に瞠若たるものであつた。第十四世紀に於てフロレンス人の利慾の念は、今の米人の如く狂熱の極に達し、猛烈なる慾情を以て事業に熱中した。政府の掟を以て、父の死するに際して、一定の職業を有せざる兒童等に一千フロリンの科料を科す旨を、遺言書に認むべしと規定したのは此國である。完全な實務的基礎に基いて、營業し初めたのも亦此國である。アルベルチ一流の人物が、初めて中等階級道德を皷吹したのも此國である。計算術が完成されたのも此國である。而して統計が大に行れたのも亦此國である。

然るに此資本家精神の榮華も、忽然として、終を告けた。成程計算の材能及び節約の習慣は猶依然として變じなかつたに違ひない、否、却つて益著し

くなつて來たのである。然し企業の精神そのものは衰退した。南部伊太利では第十五世紀の末葉より、其他の部分では第十六世紀頃より衰微し初めた兆候がある。彼等は今や利益を喜び、事業に熱中するよりも、寧ろ或は貴族の如く、或は獨立の生活方法ある人の如く、快適なる生活を樂しむ風になつた。

南部伊太利のラ・カヴァなる都會は、建築師や織物業者が住居してゐて頗る殷富なる土地であつた。然るに一五〇〇年前頃からして、建築材料や織物の需要は變じて、柏車や華麗な細帶の需要となつた。即ち市民が競うて醫師、法律家、官吏、武人等たらんとしたのを見るべきで、それより貧困を極むるに至つた。

フロレンスに於ても亦這般の封建的社會を作るの風が著しくなつて來た。之を『西班牙風の生活』と言つて、其特色は仕事を厭つて、貴族の稱號を求めるにある。此變化が始まつたのは第一のコシモ公時代からで、彼は商工業を厭ふ青年等を擧げて『オルダー・オブ・ステフェン』なる武士階級に入れた。

此頃武術の試合が却々熱心に行はれたが、此試合に加はるには、武士の格に入つて居らねばならぬ處から、フロレンスの富人等は概ね武士の株を得るに努めたのである。而も中等階級の人々は弱いのが常である。其處で彼等は餘り危險ならざる種類の試合を發明して之に熱中した。斯くて中等階級と貴族階級と相混淆するの奇觀を呈したのに一向氣のつかなかつたのは笑止である。メヂチ家にては盛に此熱狂的なる流行に肩を入れて寄附したりなどした。彼等は身分こそ平民出身であつたが、宮中生活では最も古い血統の諸侯と擇ぶ所がないのを誇りたいといふ趣意から出たとしか思はれない。

其他ロムバルディーの諸都會でも亦之と同じ有樣であつた。此變化の始は第十六世紀の初頭であつた。富有になつた中等階級人士の衷心の希望は武士と呼ばれたいと言ふ事であつた。其以下の社會階級にある者は何卒して自分の財産收入で生活したい、何も仕事せずして暮したい、出來れば田舍に自分の別莊でも造つて、其處で住みたいといふのを目的としたので

ある。中等の生活をして、平和なる境涯にありたいと言ふのが彼等の理想であつた。

二　西班牙と葡萄牙

イベリア半島(西班牙と葡萄牙)の諸都會にては、早くより資本主義の花が咲き初めたやうである。確か第十四世紀中より、バルセロナの商業には資本家精神が勃興したやうに思はれる。第十五世紀中、西班牙葡萄牙兩國より、幾多の發見航海が試みられ、遂に其世紀末にはコロンバスとヴァスコ・ダ・ガマの二大地理的發見を見るに至つた。是に由つて見れば、海岸諸都會の人民が飽くなき黄金慾と大膽な冒險に熱中したことが知れる。而して此兩者相合して、第十六世紀中に米國の征略植民等が出來たのである。然し西班牙及び葡萄牙の資本家精神は、啻に是等の企業に止らずして、リスボンの商人は東西の新地に貿易を開始し、其額は遙に伊太利人を凌駕するに至り、又セヴィルの商人は銀を積みて來り、亞米利加よりの復航には種々の貨物を積んで歸つた。加之、工業も繁昌した樣で、セヴィルには一萬六千の機臺と十

三萬人の織手とを用ひ、トレドーでは四十三萬封度の絹絲を、三萬八千四百八十四人の職工が紡いで居つた。セゴヴィアでも絹及び羊毛工業が盛であつた。

然るに何人も知る如く、第十七世紀になつて、此勢は全く衰微し、企業の精神は衰へ、實業の熱心は消へ失せ、國民は經濟的活動を棄てゝ、宗教や宮廷生活や、武士の道に身を入れるやうになつた。商工業は今や農業の如くに賤められ、門閥の者は之を侮蔑するやうになつたが、此點は伊、蘭、佛、英等の觀察者が了解し能はぬ處で、彼等は之を西班牙流の怠惰と稱した。『誰人も自分を貴族であると考へた。一五二三年、國會は國王に向つて西班牙人に帶劍を許さんことを請願したが、其後二年にして又々イダルゴ(門閥の階級)は納稅者よりも遙に優越なりと定めた。』ランケ曰く『イダルゴは國民の眞髓として認められ、官吏に任ぜられ、一般の尊敬を受けた。其處で名譽はあつても仕事をしないイダルゴの樣な生活をしたいと志し、其株(權利)に就て裁判沙汰が甚だ多く、遂には毎土曜日を特に裁判日と定めた程であつた。斯か

る風では勤勞と實務とを避け、勉節約を厭ふに至るは當然の結果である。物質上の利害も、他の人事と等しく、深く國民生活中に根を下してゐないものは、到底榮える譯には往かぬ。西班牙人全體の考は、天主教の宗教的儀式と階級政治の思想とで彩られてゐる。彼等は此兩者からして出來るだけ多くを得ることを以て、生活の天職と考へ、又斯かる態度を維持し得ることを誇としたやうである。其他に至つては、悠遊自適、以て逸樂の人生を送らんとしたのである』と。

彼等の生活方法は、全然資本家精神に背反してゐたことが知られる。而して西班牙人及び葡萄牙人の植民せる地方には、必ず母國に於ける是等の理想が移植されて居つた。

三　佛蘭西

佛蘭西は常々偉大な天才的企業家に富んでゐた。雷光石火の速力で計畫を立てゝ、之を人にわかるやうにするとか、機敏に働いて想像力に逞しいとか、多少傲慢ではあるが、精力無限にして潑溂たる意氣を有するとか、大失

敗大危險を冒して、或は囹圄の中に死するも厭はぬとか、斯種の投機的の才能ある人物が實に多かつた。第十五世紀のジャック・クールの如きは、斯種の人物であつて、彼は其天才に依て、短日月間ではあつたが、佛國の商業を高潮に達せしめた。クールは七隻の大商船を有し、三百名の代理人を使用し、世界の主なる港と取引をしてゐた。彼はチャールス七世の會計方であつて、其商業上の企業も國王の寵を受けて頗る利便を得た。故に佛國中一人として彼と競爭し得る商人はなく、彼の事務所は商業上の一大中心點となつて、ヴェニス、ゼノア、カタロニア等と雄を競うたのであつた。彼は商業や金融で(隨分如何はしき手段も取つたが)得たる金錢は、之を貧困なる宮臣に貸與し、之を利用して彌益勢力を張り、飛ぶ鳥も落さんばかりであつたが、軈て彼は謀叛罪、贋造罪及び其他の數罪に問はれて捕縛せられ、財產は沒收されて、身は國外に流竄された。

ルイ十四世の朝に於けるフーケーも亦前者と匹敵すべき有名なものであるが、斯かる人物は實に澤山あつて、今日、猶其跡を絕たぬ。レセップ、ボンク

ール、ロシュフォール、ウンベール、デベルジッサン、サッカール等の如き、皆是れ佛國獨特の人物ではないか。

モンテーヌ曰く『余は人間の眼は胃の腑よりも大きくはないかと思ふ。而して(新しき土地を征略するのに)我々は好奇心を多く所有してはゐるが、忍耐力に極めて乏しい。我々は何事でも抱擁するにも拘らず風の外には何物をも保留することが出來ぬ』と。少しく酷評とは思はれるが、頗る要領を得てゐる。

佛國ではコルベールの時代より今日に至るまで、佛國商人は企業の精神に缺乏してゐるとの聲が高い。コルベールは『我商人は熟知せざることは、何事をも之を手に取る能力がない』と歎息してゐる。彼の此言は苦き經驗から來たものである。企業的の政治家コルベールは、東印度商會を創立せんとするに際し、國人の不活潑なるに殆ど閉口したのであつた。幾度となく會議を開いて(一六六四年五月二十一日から二十六日の間に三度も開いた)富豪の商工業者に向ひ株主たらんことを勸誘したが、其困難なるは猶今

日の富豪に向つて、各種の學會や東洋に關する協會に財政的補助を與へよと言ふが如きであつた。

佛人の弱點を看破したのは獨りコルベールに止らず、サユウ、ブロンデル等、佛國人の經濟生活を熟知するものは、皆同一歎聲を發してゐる。昔の佛國商人は全く懶惰とは言へまいが、兎に角不活潑であつた。第十八世紀の中頃に出た『愛國的商人』なる一書には、佛國の實業界の仕事が緩漫なことを慨いてある。同著者は其子に向ひ、『佛國習慣の如く僅か二時間ほど仕事するやうでなく、日夜精勵すべし』と諭した。之を以て見れば、當時の佛國商人間には、フランクリンの精神が廣く行はれてゐなかつたことが知られる。佛人は米國の狀態を憧憬しつゝも、尙小說的で、想像的で、中世武士の樣な思想に滿ちてゐた。

佛人の資本家的傾向の進まなかつたのは、全く其理想とする所と合致してゐる(今日に至るも彼等の國民的精神は殆ど同じである)。最初には佛人には貴族的生活をする頗る著しい傾向があつた。『愛國的商人』の著者は、其

國人の贅澤なることを罵り、彼等が實力を資本家企業に投ぜずして不必要なる奢侈品の用途に費して、無用の浪費をなしつゝあるを咎めた。此結果として、佛國では商工業の爲め五分乃至六分の利率では資金を得ることが不可能であるのに反し、英國及び和蘭では、利率は二分半乃至三分である。著者は卽ち何物をも齎らさぬ美麗な田舍の別莊を買ふよりは、三分の利で實業に投資する方が、遙に有利であり、健實であると說いてゐる。

第二に佛人、特に官吏の如きは、安全にして尊敬される地位を好む。反物の赤い絲の樣に、是は歷々として佛國の經濟史を貫通してゐる。それが非常に資本主義の進路を妨げた。此『官僚病』『役人狂』は第十六世紀に初まり、今日に及ぶも尙消失しては居らぬ。而して其結果、商工業を輕蔑する風となり、延いて佛國に於ける資本家精神の弱點となつた。誰人も能ふべくんば實業界から退かんとし、又實業界に入ることを避け、財產があれば役人にならうと努めた。第十八世紀に入つて後も尙斯かる風が一般に行れて、これが階級に論なく佛國人一般の共通理想となつた。

商工業輕侮の風習は、之を原因と見ようが、又は結果と見ようが、兎に角七月革命の時まで流行した。余は玆に富豪が貴族にならうと欲したとか、貴族を以て最も特權ある階級としたとかと言ふのではない。斯かる風は英國にもあつて、今日と雖全く之より脫却してゐるとは言へまい。余の言ふは其點ではなく、商工の職業に對して傲慢な、殆ど侮辱的態度を取り、其社會的價値に向つて嘲笑の言を放つ點である。第十八世紀以後に於ても獨、一の西班牙を除けば、佛國の如く此風の甚しき國は他に無かつた。余はそれを言はんと欲するのである。

『若し世界に輕侮なるものあらば、そは獨り商人の爲めに取つて置かれたものである』とは、第十六世紀に於ける佛國上流社會の意見を說明した言である。此言は其頃の獨逸には適用されても、英國には適用出來まい。『金融業者の利益ある職業が、一の尊敬すべきものになつて來る時には、もう一切駄目である。其他の職業は悉く嫌惡せられ、尊敬せらるべきものも價値を失ひ、徐々として自然に名譽を得ることは、最早人を引き附けぬやうになり、

國家の政治は根柢からして轉覆されるのである。』斯くモンテスキューは第十八世紀の中葉に言つたが、其頃の獨逸に在つては決して斯かることは想像もされなかつた。

四　獨逸

獨逸に於ては資本家精神は、富豪フッガー家の時代に發達したものなることは疑ない。其處此處には更に早い所もある。此時代には一方には緻密な商賣と、他方には大膽な企業とが竝び行はれてゐた。然し茲に注意して置くべき點がある。即ち獨逸に於ける資本家精神は、第十六世紀當時に於てすら、第十四世紀の伊太利諸都市に行れたやうな勢力と强度とを持たなかつたことであつて、若し其眞相を知らんと欲すれば、次の事業を記憶せねばならぬ。

一　資本家精神の表現された企業は、即ち是れ特殊の場合であり、又其數も限られてゐる。輿論も、學者の說も、國民指導者の意見も、一齊に新精神に反對してゐたのは疑なき處である。ルーテル、ウルリヒ・フォン・ハッテンロッ

タ―ダムのエラスマス等は、皆アッガー流の商業に反對した。然し是等は學者ばかりの意見と思うてはならぬ。實に人民一般に同じ意見であつたのである。セバスチアン・フランクはエラスマスをば獨逸語に飜譯した處が非常に歡迎された。彼フランクは『惡臭ある商人階級』と言つてゐる。シセロの義務論は大に流行したもので、色々の飜譯も出來、家庭では皆之を讀んだが、其中にはシセロが商業を指して、下等なる職業と言つたことが出てゐる(勿論彼の意味したのは商賣の懸引である)。此等の點より見れば、當時の獨逸に資本家精神とも言ふべきものがあつたとしても、そは大して深くは浸込んでゐなかつたことが知れる。

二　然るに一方からは、當時の思想家が資本主義に對して、斯かる强烈なる批評を加へたのは、偶資本主義が急速に成熟しつゝあつた證據であると論ぜられよう。此反對論も全く無理ではない。其當時確に大なる企業はあつた。物の價格を下げて競爭する事も普通に行はれた、而して各方面に

於て獨占を求めもした。卽ち資本主義は相當に發達してゐた如く見へる。然し此處に想起せねばならぬのは、資本家精神を組織する其他の要素が、未だ獨逸では幼稚であつたことである。計算術を例に取れば、前章にも說けるる如く、獨逸では第十六世紀に入つて、漸く計算術を知り初めたに過ぎない。第十五世紀ではオット・ルトランドの帳簿、第十六世紀ではルカス・レムの商業報告の如きは、第十四、五兩世紀に於ける伊太利の記錄とは、殆ど比較にならぬ。而して第十八世紀になつてさへ、獨逸は遙に英國や和蘭の後にあつたではないか。

三　されば資本家精神の發達があつたにせよ、それは極めて短日月の間、繼續したに過ぎない。第十六世紀の終る前に、獨逸は伊太利の如くに封建化し初めて、企業家の有名なものも、やがて其中に捲込まれてしもうた。企業家の後繼は無つた。有つたにしても甚だ少かつた。中等階級の人士は輕薄なものであつた。商工業生活の脈膊が注目さるるに至つたのは、漸く第十八世紀になつてからのことで、それすら第十九世紀の初には、既に勢を失つてゐた。獨逸に於ける資本家精神は、一八五〇年に至つて再び覺醒したと言ふも過言ではない。今日では資本家精神は、偉大なる發達を遂げて獨逸は殆ど米國に追及せんとするに至つた。されば獨逸近代の資本家企業の物質は近代式企業者の特質を備へたものであるが、こは第十二章に於て論じやう。今や獨逸企業家は(其殆ど追及せんとしつゝある米人と共に)最も安全な形式を代表してゐる。彼等が他の近代企業者と異る點は、概ね左の如くであらう。

(イ)適應性　獨逸人が世界市場に冠絕する所以は、多くは其顧客の所望と特性とに適應するの勢力に負ふので、其點は幾多の觀察者達が已に繰返しく〳〵て論じた處である。彼等は或狀態を速に了解して、之に適合する性質を持つてゐる。

(ロ)大なる組織力　獨逸の船舶、銀行、電氣等の諸事業に於て見られるが、米人と雖斯くまで大なる組織力を有せぬ。

(ハ)科學に對する態度　獨逸の大工業、特に電氣及び化學工業の如きが彼

の如く偉大なるに至つたのは、自然科學の結果に綿密なる注意を拂つて、其結果を生產法に利用したからで、こは一般に認められる所である。

經濟學に對する獨逸企業家の態度は、今や之を決定せんとするの時期に際しつゝある。目下の所では獨逸の企業者は、經濟學の敎ふる結果に基いて、其事業を組織するを以て、成功の一條件と認むるやうになつて來た。之も彼等の特質となるのであらう。兎に角、實業經營の方法、卽ち商業的計算は獨逸流の資本家企業者に於て、最も完全の域に達したのであると言つてよい。

五　和蘭

恐らく和蘭は資本家精神が最も十分に成長した最初の國である。各部面共に一樣に生長して、其發達は頗る包括的であつた。且つ和蘭に於ては全國民が資本家精神を帶び、第十七世紀には同國は拔群の資本主義國として、世界から認められた程である。和蘭は其眞似をするに熱心な諸國の嫉視する處となつた。實に商人たるものの高等の學校であり、中等階級道德

の榮えた、灌漑の行屆いた本國の觀があつた。和蘭人は海國人であり、武勇な國民であつたが、其商才に於ては天下無双であつた。彼等は時に或は投機熱に浮かされたこともあるが、後には國際株式投機活動の中心となつた。此等の事實は世人の周知する所なれば、唯そを列記するに止めよう。

第十七世紀に於ける和蘭の商業繁榮の有樣は、史家ランケの記する所を見やう。彼曰く。

是より後、和蘭は世界の產物より貢納金を徵した。當初は隣海なる東西兩岸地方との仲介者となり、東岸地方の木材、穀物を以て、西岸地方の飲食、鹽、酒、麥と交換した。和蘭は北海に其船舶を送り、其海產物を南國より流出するブィスチュラ、セーヌ兩河の間に位する諸港に分配して、ライン、マース、シエルトに魚類を運んだ。サイプライスに魚類を輸送して、羊毛を輸入し、ネーブルスに送つたものは絹物と換へられ、斯くて昔のフィニシア人の海岸地方は、遠き日耳曼人に貢を納めたのである。あらゆる商品は和蘭に輻湊した。コンタリニは一六一〇年には、上等の小麥及び穀物が十萬袋も和蘭の倉庫にあるを見、又ラレーは和蘭には最も少くも七十萬クォターの穀物は、常に

之を貯へて居るから、隣國の急に應ずるには支障ないと言明してゐる。無論そは利益を見ることである。卽ち凶作の一年は彼等に豐作の七ケ年に比すべき程の利益を與へた。加之彼等は原料の儘で物資を分配するに滿足せず、之に加工した。されば彼等は年々英國よりして生地の吳服地八千反を輸入し、之を染めて利益を得たのである

彼等が歐洲貿易に參加した所は隨分大きかつたに違いないが、其中最大なる商業上の成績であつて、名聲二つながら併せ得たのは東印度方面に於ける彼等の冒險であつた。西班牙は和蘭の襲擊を恐れたが、就中國王初め人民に至るまで、最も怖れたのは、和蘭人の印度遠征であつた。其結果は二重であつて、一に西班牙人に大打擊を與へ、二には蘭人の活動を擴大したのである。コンタリは蘭人が完全なる組織を立てゝ、年々十隻乃至十四隻の船舶を出すのに驚いてゐる。そは一六一〇年頃のことであつて、彼は和蘭印度商會の資本は、約七百六十萬フロリンであらうと計算した。斯かる大仕掛な四海包括的な事業をして、和蘭人は彌〻未開の國土へ進んだのであつた。而して和蘭の本國にては、港といふ港、入江といふ入江は帆船にて充ち滿ち、

運河といふ運河は荷船で埋つて居つた。「俗に和蘭では陸上生活をするものと、水上生活をするものと同類であると云ふが、それには意味がある事である。概算して同國は大船二百隻、小帆船三千隻を有しアムステルダムは其主要港であつた。帆檣林立とは實景であつて、市の附近には無數の檣で森の如く見へたのである。此勢なればアムステルダムが膨脹したのも驚くべきでない。三十年の短い歲月の間に、其境界は兩度まで大擴張をした。一六〇一年には六百戸の新家屋が建てられた。コンタリには一呎平米の土地は一『スクード』の價なりと報じてゐる(詰り土一升金一升である)。同人の言に依れば、一六一〇年に於ける和蘭首府の人口は五萬人であつたと言ふ。工業は榮え、仕事の性質は立派なものであつた。富者は依然中等の生活をなして節儉を旨とし、假令その賣る吳服地は上等なるも、當人は粗服に甘んじた。貧乏人は其必要とするものを與へられ、懶惰は大罪として手痛く處罰された。印度輸出は一尋常事であつて、四方八方へ船を出した。實に一家として航海を敎へざるはなく、一軒として海圖を持たぬはなかつた。既に海洋を征服す、天下豈恐るべき敵があらうか。和蘭の水夫は敵に降參す

ろよりも、寧ろ自ら船を燒き捨つるといふので、有名であつた

更に之に附言すべきは、蘭人が中等階級道德の養成に於て、又其計算術の普及と緻密なる點に於て、共に世界に冠絕してゐたことである。此事は前にも述べて置いた。

扨、斯くの如く非常に發達せる資本家精神は、抑、如何になつたか。其或部分、特に計算術は殘存したが、其他の要素は或は衰微し、或は全滅に歸した。凡そ海外の事業は、當初よりして軍事的勇氣を以て彩られたものである。然るに第十七世紀の未だ終らざるに、蘭人には既に此勇氣が銷沈しつゝあつた。第十八世紀となつては、企業の精神其もの迄も衰へた。中流人士は或他の國々の如くに封建化するには至ら無つたが、彼等は植民地や投資よりの一定收入で悠々と樂な生活をしたのである。第十八世紀中、和蘭は全歐洲の金貸國となつたことは、世人の熟知する所であつて、資本家企業に投資したものは、もはや少しでも發見されぬ。蘭人は商人でなくなり、コンミッション取になつた。次でコンミッション取から遂に金融業者になつてしまつた。其扨つたものが國債にしても商業手形にしても、そは別に問題ではない。苟も手形割引が、中等階級人士の主なる職業となる時には、企業の精神は既に破壞されてしまつたのである。

六　大英國

英蘭、蘇格蘭及び愛蘭では、資本家精神の運命が頗る異つてゐる。愛蘭は資本家文明の國としては殆ど全く度外視して宜からう。今日只今に至るまで、資本家精神の感化少きこと、愛蘭の如きものはない。されば同國は研究するに及ばぬ。

英吉利に就ては以來屢、叙說する處があつた。冒險心と征略の氣象に驅られて、企業の大精神が磅礴してゐたのは、第十六世紀の頃で、是れ卽ち資本主義の英雄的時代である。我々は既に地主階級が資本家企業者と變遷せるを見た。又第十七世紀の終より第十八世紀の初に渡つて、投機企業が全盛を極めた暴風時代も見た。我々は又第十八世紀の末に至つて、中等階級道德及び計算術が完備の域に達し、英國が獨佛兩國等の模範であつたのを、

見た。最後に又吾等は近世産業主義の誕生地が英國であることも知つてゐる。

第十七世紀の末より以來、特に蘇格蘭と合併してより、英國の資本主義の發達は、蘇格蘭に於ける資本家精神の大なる影響を受けた。抑、蘇格蘭の如く奇體な樣子で、資本主義の生れた國は世界にないのである。其現出の唐突たる、恰も一發の銃聲が、資本家精神の合圖となつて、茲にもう成長しかゝつてゐた此國に入り來て、忽ち國内を征服した觀がある。そは一夜にして花が咲いたやうなもので、世に斯くばかり驚くべき現象はない。

第十七世紀までは蘇格蘭人は隣邦との商賣を營み、言ふに足るべき船舶も持たず、資本家精神には全く觸れてはゐなかつた。第十七世紀になつても這般の事態は別に大して變化しなかつた。唯一つ宗教上に注目すべき變化があつて、宗教改革の實現に際し、全國の精神界は非常に動搖した。資本主義が忽然として現出したのは、漸く第十七世紀末のことで、茲に各人は利慾心の羈を切つて、無數の企業に着手するに至つた。此證據は澤山にあ

るが、唯それに關する一二の說を揭げよう。

バートン曰く、『革命の鎭りてより、蘇人の熱情は宗教爭議と戰爭の舊逆より背きて、商業的企業の方向に、走るやうになつた』と。一六九五年バーネットは曰く、『此頃の蘇格蘭の貴族、平民、共に貿易業に從事せんことを希ふた』と。一六九八年にフレッチャー曰く、『何人が仕組むだといふ譯ではないが、此國民の天才上に、未曾有にして豫期し難い變化が生じ、宛かも或より高き勢力に依つて統一指導さるる如くに、國民の思想と傾向は一齊に商業に向けられ、共に其進歩に努むるに至つた』と。其處で淸教徒の僧侶等は不安を感じて來た。彼等は猶其雛鳥が泳ぎ去るのを見て、心配顏に岸邊に佇む家鴨の如くであつた。一七〇九年ロベルト・ウドロウなる僧侶は、『我々が一層貴重なる利益を度外視して、餘りに商業を好むの罪は、我々の審判に書き下るべしと思ふ』と言つた。此年佛人が數隻の帆船を捕獲し、其損害の幾部分はグラスゴウの負ふ所となつたのを見て、ウドロウは『我貿易は、宗教の室内に置かれたれば、神は之を憤ふらせ賜ひつつあるを信ず』とて、右の損害を神罰な

りと言うた。

新精神が、第十八世紀の後半以來、英蘭及び蘇格蘭に發現した資本主義の發達に寄與する所の大なりしは明白な事實である。其發達の經路は如何であつたか、英國と他國、例へば獨逸と比べて、現在の地位は如何であるか。信用すべき權威ある人の言に徵するに、彼等は今日『資本主義凋落』の狀態が、英國に現れたりと言ふに一致する。こは諸方面から觀察されるのである。

一　明晰なる思考は、經濟活動上の潑溂たる支配力でないやうになつた。英國企業家は、獨逸人とは異つて、世の進歩と歩調を共にしない。彼等は科學を其用に供しないのである。實に工藝技術界に於ては、彼等は遙に後れてゐる。英國人は、最新の方法を採用するは、到底不可能なりと言ふ。原料品を彼等に渡しても、彼等は研究室で其性質を試驗しないで、唯其取引先の商會の名を見たゞけで滿足してゐる。英人は機械を誇つてゐるが、實はそは舊式千萬なもので、塵溜へでも棄てるより外に、仕方のない物である。

一八九七年の青書は、英國商人が舊風を維持することを報告してゐる。

『獨逸人は顧客の所へ品物を持つて往くか、然し英國商人は顧客が自分の所へ來るのを待つてゐる』。英國の商業代理人や旅商人は餘りに豪然たる生活をする。且つ英國の封函は重過ぎるが外國では必要に應じて輕いもので包む。英人は品物に最後の磨きをかけることに無頓着である。彼等は又現金取引を要求して、顧客の必要とする信用取引には別段注意しない。廣告もせねば、品物も餘りに善過ぎて、價格も從つて高きに失する。英人は自分の嗜好を需要者に强制する。自分が最善と思ふ品物でなければ決して送らぬ。萬事が此調子で、英國の銀行制度の如きも、嚴重過ぎると思はれる。

二　企業の精神、實業に對する興味、勤勉の心等は、總て衰へ往きつゝある。舊時の實業的理想は消失して、新しき生活觀が之に代りつゝある。英人は贅澤を好み、貴族的生活をなし、特に遊獵、競技等を愛する。此風は今や國內に蔓延してゐる。其蔓延するに從つて、經濟活動に要せらるゝ精力は消耗するのである。シルツ・ゲフエル ニッツの『英國の帝國主義及自由貿易』に曰く意

惰なる富者階級の間では、獨逸の書籍蟲は、米國の黃金王と同じく賤しめられてゐる。兩者の相異は懸絕してゐるが、彼等は働くからして、齊しく愚者の部類に屬する。此意見は從來貴族特有のものであつたが、今や英國の中等階級の上流でも、左樣に考へるやうになつた。國民遊技中で、最も人氣のあるものは、頗る富豪的色彩を有してゐる。彼等は黑人、支那人、卽度人等の勞働者に依て生活する貴族的人種と心得、天下にありとある國々より、配當や地代を徵收する。然かも彼等は本國の土地をば、唯々一の奢侈品として視るのである』と。

七　北米合衆國

米國は資本家精神の發達に取つては、極めて大切な國であるが、本書には少しゝか米國の事を書かぬ。今之をば三標題に分つ。

一　殖民地の建設せられて以來、資本主義に感化せられた經濟組織の存在せざる以前から、米國の國民性中には、資本家精神が適合しさうな所があつた。

二　米國では他國よりも一層速に、又一層完全に資本主義が完全の域に達した。近代米國主義の思想は、第十九世紀の初から根ざしてゐて、其頃からして米國流の生活風を形造らんとしつゝあつた。こは第十二章に讓る。

三　資本家精神の結果が如何になつたにしても、兎に角現今の米國に於ては極點に達してゐる。米國では未だ其精神の强力が衰へず、今も猶資本家精神の旋風が吹き荒んでゐるのである

(第四) 過去及現在の中等階級

第十一章 舊式の中等階級

中等階級は時代に依て、各、其特色を異にする。資本主義の當初から第十八世紀の半頃までを余は初期資本主義の時代と名附けたが、此時期の資本家企業者は、之を劃然と近代の資本家企業者と區別することが出來る。然らば此等舊式の中等階級人士とは如何なる人々であつたか。

彼等も亦一の資本家企業者であつた。彼等の目的とする處は利益であつて、企業は其方法に過ぎなかつたのである。彼等は投機的のことも爲し、打算もし、又中等階級の道德も修養したのであつた。然らば如何なる點に於て近代の中等階級と違つてゐたのであらうか。それは次の一句に盡きる。即ち彼等は其思想と行動とに於て、生きて呼吸してゐる人間の禍福に依て動かされてゐたのである。資本家時代以前の中心主義は、未だ其效力

を失つては居らぬ。即ち依然として人間が萬事の中心であり、何事も人間を中心として割出すのである。生活は從前通り自然的である。此時代の中流人士は、未だ兩脚を確乎と踏まへて立つてゐた。未だ四つ這ひになつて驅け廻りはしなかつたのである。

資本主義が將に曉けんとして、ゼノアの貴族的商人が城砦を築き、ウォター・ラレーが黃金鄉の探險に出て行つた頃には、資本家時代以前の人々は、極めて僅しか殘つてゐなかつた。是等はデフォーやフランクリンの書中に見ることが出來るのである。然し初代の健全なる食慾を有した自然人は早、既に消へ失せてゐた。彼等は中等階級の道德と言ふ窮窟な衣服を纏ひ、打算的習慣の壓制の下に屈從すべく餘儀なくされた。其爪は圓められ、其肉食の齒牙は鈍らされ、其角は皮袋に收められた。

然し富める地主や大なる海外貿易商人も、銀行家や投機師も、製造業者や呉服商人も、凡そ資本主義に膝を屈せる者は、皆生活上の健全なる要求に從つて、其經濟活動を適應させたのであつて、彼等に取つて實業は唯是れ生活

の方法に過ぎなかつた。彼等自身の利益と、彼等と共に働く人々の利益とは、爲さんとする事の範圍と方向とを定めたのである。若し之を知らんと欲せば、此等舊式中等階級の意見を調べるに限る。

一　彼等は富に對して如何なる考へを有してゐたか、又利益に對して如何なる態度を執つたか。富は無論貴重視せられ、各人は之を得ようと熱望した。然し富其物は直接の目的ではなかつたので、其唯一の效能は生活的價値を創造し又は保存する點にあつた。アルベルチよりデフォーやフランクリンに至るまで、皆以上の如き考へを有してゐた。

アルベルチは『何卒懇願奉ります』と言ふのは、自由人が最も苦痛として厭ふ言葉であるが、此語を發せずにはすまされなかつたものでなければ、金錢の眞價は理解されぬと言つた。又次の如き言をも爲してゐる。富は汝に獨立と自由とを齎し、汝に友人を與へ、汝をして尊敬と名譽とを得せしめる。『汝の使用し能はぬ金錢は畢竟一の重荷に過ぎぬ』

更に同調のものを一二揭げて見よう。第一の證人はフランクリンであ

る。彼は富と富を正しく用ふる心とを賦與されたものは、天より特別な立派な賜を頂戴した人であると言つた。一度富を得れば、之を善用するのが第一の義務である。『賢き人は富を正當に得、眞面目に使ひ、愉快に分配し、而して滿足して生活し得るだけしか望むものではない。』『富は勤勉と巧妙なる活用とに依りて、斷えず增さねばならぬ。之を寢かして置いてはならぬ。常に其所有者の富を增し、周圍に幸福を撒かねばならぬ。物品や金錢を蓄積するのは尤な事であるが、之を善用するのは賢き仕業である。幸福とは富に非ずして、寧ろ適當に之を利用することである。富は名聲を齎し、安全を保證し、尊貴にして有用なる幾多の事業をなすべき手段を與へる。加之、富は正當なる方法に依りて得べきものである。正直に得た富でなければ喜悅を齎すものではない。汝若し利益の爲めに何物をか賣らんとするか、良心の靜かな小さき聲に傾聽し、適當の利益を以て滿足せよ、買手の無智に乘じて利することがあつてはならぬ。

口だけでは、斯かる訓戒を與へるのは容易である、此樣な訓戒は其人の暇

な時に考へた事であつたらう、それは靜かな勉强室で聞かれた良心の聲で、日中活動の際には忘れられたものであつたかも知れぬ。從て餘り信用を置く譯にはゆかぬ―斯樣な反對論もあらう。

二　然し此反對論が誤つて居ることを見るには、是等の著者が、實業其物に對して如何なる態度を採つたか、實業家としての彼等の行爲は如何であつたか、其仕事の遣口は如何なる風であつたか、一口に言へば、彼等の『流義』は如何であつたか。是等のことを調べれば、彼等が富に對する態度と同じ精神を有してゐたことが知れる。之が第二點である。

扨、彼等の實業の步調は、未だ遲々たるもので、其活動は靜かにして何等風波を見るに至らなかつた。フランクリンは出來得るだけ有用に其時間を費さうと決心し、又勤勉は第一の德なりと言つたことを想起して見よう。彼の日課は、六時間を實業に、七時間を睡眠に費し、其他の時間を祈禱、讀書及び交際に提供した。フランクリンの實業は大したものではなかつたにした處で、兎に角、彼は勤勉なる企業者の一例である。

又ボーツエンの卸賣商人は夏は全く出店を閉ぢて、附近の高地なる保養場に過した。彼等はそれほど閑暇を愛したのである。彼等は一日の中、一年の間にも閑暇を求めし如く、一生涯の間に最大の閑暇を求めることを忘れなかつた。從つて商業又は工業に依て、相當の資產を蓄積した者は、中年で引退し、出來ることなら田舍に土地邸宅を購ひ、安樂に晩年を過すのが、當時一般の習慣であつた。ヤコブ・フッゲルは『余に儲けることの出來る間は、余をして儲けしめよ』と言つた。資本家經濟の十分發達した時代に斯かる考へを抱くのは極めて當然のことであるが、其當時にあつては非常に進んだ考へであつたから、奇妙な男と呼ばれ、不思議な人物と思はれたのも無理はない。隱居紳士たることを以て第一の理想とした時人の見地よりすれば、彼は不思議な人であつたに相違ない。

伊太利の商業に關する書籍には、商人が田舍に引退して平和に生活すると言ふことが書いてある。同じく獨逸の文藝復興時代にも、商人の封建化する傾向があつた。第十七世紀の英國商業界でも、依然として實業家にし

て退引を望む風があつた。之を要するに、初期資本家經濟時代にあつては、何處に於ても隱居紳士の理想を、其信條の一としたものらしい。

第十八世紀の前半に、英國で此理想の行はれたことは、デフォーの言で十分證明される。二萬磅も蓄積した上は『何で其上に商賣する必要があらう、是れだけの財産があつたら、其上何を望む必要があらう、最早仕事はして仕舞つた、退引すべき時である、既に世間を自由に爲し得る上は、勞苦は之を世間に委せて退くべきである』と彼は言つてゐる。又彼は、富を得た人は『世間的地位、卽ち商人と言ふ地位を罷めて、一年千磅の收入ある紳士の身分になるのである』とも言つてゐる。デフォーは二つの正當な忠告を與へた。第一は收入の範圍内で生活する、卽ち一年一千磅の内、半分を費消して、半分は之を蓄へ、子孫の計をなすと言ふこと、第二は既に得たる財産に依て樂しむ爲めに實業より引退したることなれば、冒險等するには及ばぬ、從つて投機などには一切手を出してはならぬ、其地位になつたならば、唯靜かにさへして居ればよいのである、悠々自適、喧噪忽忙なく、靜謐平和の中に、晩年を送りたい

と言ふのが實業家の退隱する時の辭でなければならぬと言ふことである。

財産が出來て後は、左樣するのも甚だ結構であらうが、扨其財産を作つてゐる間の彼等の仕事は如何であつたらうか。それは極めて遲々たるものであつた。其營業振は一定時間内に出來るだけ僅少な取引を爲したに過ぎぬ。商業の外部的發展は極めて微々たるものであつたから、從つて其内部の發達も亦見るべきものがなかつた。出來るだけ物價を高くし、僅少の資本で大利益を得る―之が其營業の精神であつた。當時の企業家は取引を少くして、利益を大にする主義を採つたやうに察せられる。是は昔の組合制度の桎梏を脱せぬ小商人に限らず、隨分大きな商業會社も同樣であつた。例へば和蘭東印度商會の如きも、僅かな取引をして大利益を取る方針であつた。其故彼等は時に香木を切り倒し、又豐作であれば作物を燒棄てたりなどしたこともあつた。

當時一般に富豪を相手取ることを目的としてゐた。蓋し大規模の需要に應ずるよりも容易であつたからに外ならぬ。第十七、八兩世紀に行れた

經濟論は、高價を以て利ありとしたから、斯くの如き現象も當時に於ては當然起るべきことであつた。

舊式の中流人士は几帳面な學者風の樣子を帶び、威嚴を示してゐた、是れ彼等が內心平靜であつたからである。文藝復興時代の長い毛皮の外套を纏つた人々或は次の代の膝洋袴を穿ちて假髮を被れる人々を見て、如何にして忙しい人達であつたと思へようか。確かな著書に據ると、舊式商人は靜かに步行し、決して急いでは步かぬ、夫は用事があるからであると言つてゐる。アルベルチは身自ら多忙の人であつたが、多忙の人にして徐行せぬのを見たことはないと言つた。是は第十五世紀のフロレンスに就て言つたことである。第十八世紀のリヨンでも同樣で、時人の言ふには、『當地では吾等の步調は遲い、そは人が皆多忙であるから。然るに巴里では、人々は皆急步してゐる、蓋し同地では何も爲すべき事がないからである』と。グラスゴーも亦同じく、其商人は『赤き衣を纏ひ、羽帽を被り、假髮を戴き、ブラニステーンス(市廳と隣接官署の前面の道路、約三四百ヤードの間にて、當時のグラ

スゴーにて唯一の舗道)を往きつ戻りつし、互に物々しく話し合ひ、自分より賤しい者が來て禮をすると大威張で點頭した。』

三　舊式商人の競爭や顧客に對する態度は、其營業の流義に起因したものである。彼等は先づ第一に慰安を望んだ。『停止主義』は資本家時代以前の經濟的活動を支配したものであるが、資本家時代の初期に當つては、未だ其勢力を失つてゐなかつた。從つて顧客の範圍は猶垣で圍はれた保留地の如く、全然自分のものと定まつてゐた。是は海外の土地で貿易商會に特許權を與へた事實に比すべきである。

今『停止主義』が如何に重要なるものであつたかを簡單に論述したいが、其前に之と關聯した一二の營業主義を指摘して置かう。是等は停止的經濟組織より、自然に生じた結果であつて、舊式中流人士の經濟觀中に包含されてゐる。

顧客を求めることは好ましからずと見られ、又隣人の顧客を奪ふことは基督敎徒らしからぬ不德の所業として賤しまれた。商人の訓言に曰く、『口